

考古論叢

神奈川

第22集

神奈川県内における堀之内1式後半期の地域相について 鰐淵 義紀

[資料紹介]
鎌倉市天神山城出土の古代土器 押木 弘己

[資料紹介]
宮山中里古墳群出土の装飾付須恵器破片について 東 真江

平成28年(2016)2月
神奈川県考古学会

考古論叢 沖矢河 第22集

平成28年2月

目 次

神奈川県内における堀之内1式後半期の地域相について.....	鯨淵義紀	1
【資料紹介】 鎌倉市天神山城出土の古代土器.....	押木弘己	29
【資料紹介】 宮山中里古墳群出土の装飾付須恵器破片について.....	東 真江	43

神奈川県考古学会

註名中の「神奈河」は、鶴岡八幡宮文書のうち、北条時宗が
文永3年（1266）5月2日に武藏目代殿あて発給した下文中の
神奈河に現るもので、これが地名「神奈川」の初出文書である。

神奈川県内における堀之内I式後半期の地域相について

鯉渕 義紀

はじめに

I. 横帯文土器の集成と分類

2. 神奈川県内における堀之内式I式期の集落動向

まとめ

はじめに

堀之内式土器は、型式設定の当初から地域偏差の大きい土器として理解され、「日本先史土器図譜」(山内1940)において「堀之内旧型式」とされた堀之内I式土器について「下総方面」のものと「武藏相模方面」のものとでは、地域差が存在することが指摘された。すなわち、神奈川県横浜市鶴見区小仙塚貝塚出土の鉢形土器と千葉県市川市堀之内貝塚出土の朝顔形深鉢が対比され、前者が「武藏方面」に多い土器、後者が「下総方面」に主体を置く土器として位置づけがなされ、関東南西部と東部では土器の様相に違いが認められることが明らかにされた。型式設定当初は、称名寺式が未だ未発見であったこともあり、中期後半の加曾利E式と後期中葉の加曾利B式土器の間を埋める土器として理解され、加曾利E式土器の伝統を残しつつ成立した土器とされた。

しかし、1968年に『小名浜』^(注1)が刊行され、馬目順一氏により東北地方南部に主体を置く網取I式との関連が指摘され、南関東東部の堀之内式は、「網取式」の影響下に成立した土器である可能性が認識される契機となった。このような背景のもとに1982年に「シンポジウム堀之内式土器」が開催され、南東北・北関東、南関東東部、南関東北西部、南関東西南部の各地の土器様相が明らかにされた(市立市川考古博物館1983)。このなかで、堀之内I式土器は3細分され、各地の土器に網取式の影響が認められることが確認された。南関東西南部では縄文地紋の土器が少ないことが地域性として挙げられ、称名寺式土器の系譜上に成立したと考えられる下北原遺跡出土土器についても称名寺式からの直接的な系譜をたどることが難しく、その成立にあたっては、網取式など他型式の関与が考えられたとある。^(注2) 1990年には第4回縄文セミナーにおいて南関東、群馬県、長野県、新潟県、南東北にわたって堀之内I式土器の集成が行われ、鈴木徳雄氏により堀之内I式土器を構成する器形を独立して変遷する系統と位置づけ、「類型」として把握された。この成果を受け、石井寛氏は『牛ヶ谷遺跡 華藏台南遺跡』の報文において堀之内I式土器の5細分編年を行い、堀之内I式の6類型の神奈川県内における消長を明らかにした(石井1993)。この5細分編年は堀之内I式土器研究の基礎となるもので、現在でも地域性を考慮した編年体系として周知されている。このなかで石井氏は小仙塚類型をC群とし、3群に細別され、渦巻文を基調とするものをC I群、懸垂文主体のものをC II群、横帯文主体のものをC III群として編年されているが、資料的制約もあり、C I群の資料を主体として考察されている。C I群は渦巻文を基調とするが、多様な資料群で構成されており、さらに系統的に細分できる可能性もある。

こうしたなかで、これまでの研究でも指摘されていたが、伊勢原市域においてC III群が卓越する状況が確認されており、伊勢原市池端・椿山遺跡では9号住居址から東北地方の十腰内系と考えられる鉢形土器とC

Ⅲ群の横帯文土器が共伴する事例が報告された（小川・井辺2004）。堀之内式I式中段階に比定されると考えられる資料群で、CⅢ群のほか、A群、B群、CⅠ、CⅡ群なども出土しており、該期の地域様相が理解できる構成となっている。

南関東西南部における堀之内I式変遷の大まかな理解は、縦位懸垂文様が主体であり、縦位懸垂文様を単位文とする古段階から単位文を連絡する斜行文が施文される中段階、そして、集合沈線によって懸垂文が埋没して単位文が消滅する新段階という変遷が理解されており、新段階では単位文の消滅とともに頸部文様に区画が発生して横位展開の文様が、派生して堀之内2式に移行するというものである。これに対して伊勢原市域ではI式中段階からすでに横位展開文様が主体的であり、神奈川県内でも異相な状況となっている。そこで堀之内I式土器の横位展開文様に注目し、神奈川県内の資料集成を行い、横帯文土器の分類^(注3)と分布状況を検討し、南関東西南部における地域諸相のありかたを探る一助としたい。

1. 横帯文土器の集成と分類

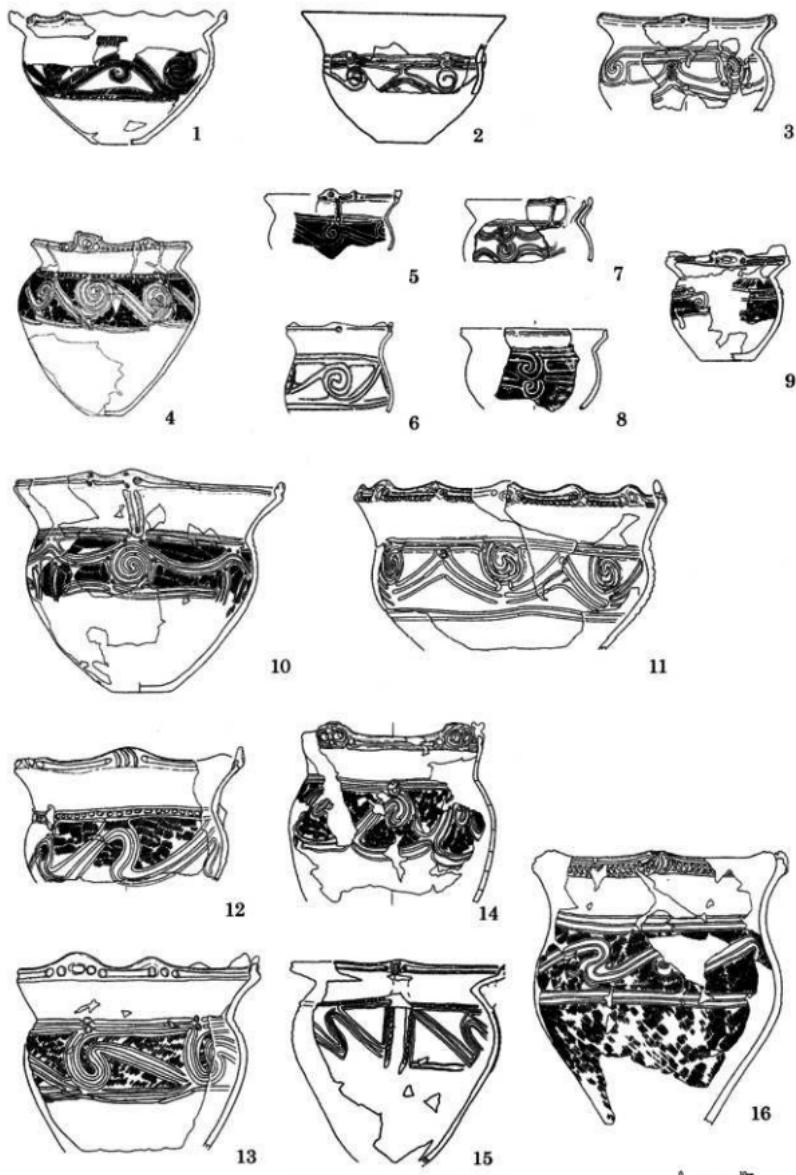
今回の集成では横位展開文様に主題をおくことからCⅠ群のなかで渦巻文の一段構成の文様を描くもの、渦巻文を連絡する文様が斜行文でないものなど一群も含めて集成した。管見に触れた資料は、21遺跡52例である。既発表の報告書文献を涉獵し、可能な限り集成した。21遺跡中14遺跡は相模川以西に所在する遺跡であり、ここでも県西部における偏在性が看取される。以下、体部文様を基準として土器の分類を行う。

(1) 入組J字状文と三角形の波状文で文様が構成されるもの。（第1図-1、2）

3本単位の沈線で文様の描出がなされ、十腹内I式土器の体部文様にみられる三角形文に類似した文様が一段施文されている。東北地方北部に分布の中心を置く十腹内式土器系統の土器と考えられるものである。第1図-1は伊勢原市池端・椿山遺跡J9号豎穴住居址出土の鉢形土器である。器形は堀之内式小仙塚類型特有の鉢形を呈し、口唇部には刺突文と沈線による堀之内I式土器に通有の口縁部文様帶が施されるが、体部文様は十腹内I式土器の三角形文が三本単位の沈線によって描かれ、三角形状の波状文の頂部にはJ字状文、頸部を区画する横位の磨消繩文からJ字状文が垂下し、山形の波状文から派生する逆J字状文と組合い、入組J字状文を形成する。磨消繩文は3本単位の沈線内に整然と充填され、入組渦巻文では入組部分では沈線内から逸脱して繩文が施文されるが、この施文方法も十腹内I式の文様施文方法と共通している。2も3本単位の沈線で山形の波状文と渦巻文などが描かれていることから十腹内式と堀之内式土器の折衷された土器として評価したい。2の土器については堀之内式土器に特徴的な8の字状貼付文が付せられており、かなり在地化が進んだものであろう。

(2) 渦巻文を基調とした文様を描くが、体部文様帶の下端を沈線で区画するもの。（第1図-3～11）

体部文様の下端が沈線によって区画され、横位展開の文様帶として認識される一群である。なお、体部下端の区画は破片資料のため、確認できない個体でも渦巻文を連繋する文様が横位に展開し、横位展開文様と推察されるものも含めている。3は盲孔を縦位に配列した8の字状文を単位文としてその両側に頸部区画沈線から渦巻文を派生させ、下端は8の字状文を連繋する弧状文で区画する。繩文は充填されない。4は渦巻文を斜行文で連繋するが、口縁部には環状把手が付され、把手部分と頸部の区画線には刺突文が多用され、三十稻場式の影響が想起されるところである。5は渦巻文と斜行文が一体化し、入組状文となっているもの。6は石井氏の5段階編年により4段階に設定されたもので、同じく渦巻文と連携する斜行文が弛緩し、融合



第1図 横帯文土器集成図(1)

(1:池端・椿山、2:椎子塚、3、11:三ノ宮・下谷戸、4:大島下台、5、7、8:青ヶ台、6:下北原、9:宮ヶ瀬・北原、10:宮ヶ瀬・表の屋敷、12:稻荷山、14:東谷戸、13:中里、15:久野北側下、16:原口)

化されつつある段階である。7、8は渦巻文が2段施文され、これを弧線文や方形文でつなぐものである。9は帯繩文が施文され、区画内に刺突文列が施される。10は文様帶を区画し、区画に渦巻文を配し、波状文で連繋してその頂部には懸垂文が描かれる。11も渦巻文を単位文として連繋する沈線で三角形文を描出する。

(3) 入組波状文が横位に展開する一群(第1図-12~16)

渦巻文と斜行沈線が一体化して入組波状文を形成したと考えられる一群をまとめた。12は下端の区画は不明だが、波状文が展開し、頭部と波状文の間に沈線による三角形文を描き、繩文が充填される。13は単位文化した入組波状文が展開し、区画された体部文様内に繩文が充填される。14は下端区画と融合して三角形文をつくり、これが単位文化している。15は刻み隆縁により頭部を区画し、頭部文様は刻み隆縁による懸垂文で区画され、その内部に12と同様に入組波状文と三角形文が施文されている。16は口縁部に矢羽根状の刻みが施され、3本単位の沈線で区画された体部文様内に入組波状文が展開し、波状文の入組部分に小さなJ字状文が派生する。これらの一一群は石井編年のCⅠ群に属するが、入組波状文に類似する文様を主文様としており、小仙塚類型のなかではかなり異質である。13の中里遺跡出土例は焼土址から出土しており、他に共伴する遺物としてH字状文を残した下北原類型と堀之内類型の朝顔形深鉢、懸垂文主体のCⅡ群が出土しており、朝顔形深鉢は文様帶の下端区画がまだ発生しておらず、堀之内Ⅰ式中段階に比定できることから本類の成立も十腰内式の間与を受けて中段階後半、石井編年4段階に考えるのが妥当かと思われる。

(4) 渦巻文などの単位文が集合沈線などの充填により埋没しているもの。(第2図-17~21)

渦巻文、入組波状文などの文様が集合沈線の充填によって埋没しているもので、堀之内Ⅰ式新段階に相当する。17、19、21は渦巻文、18は入組波状文が主文様として施文されるが、沈線の充填により器面の齊一化がされているものである。

(5) 渦巻文と体部文様区画が融合化しているもの。(第2図-22)

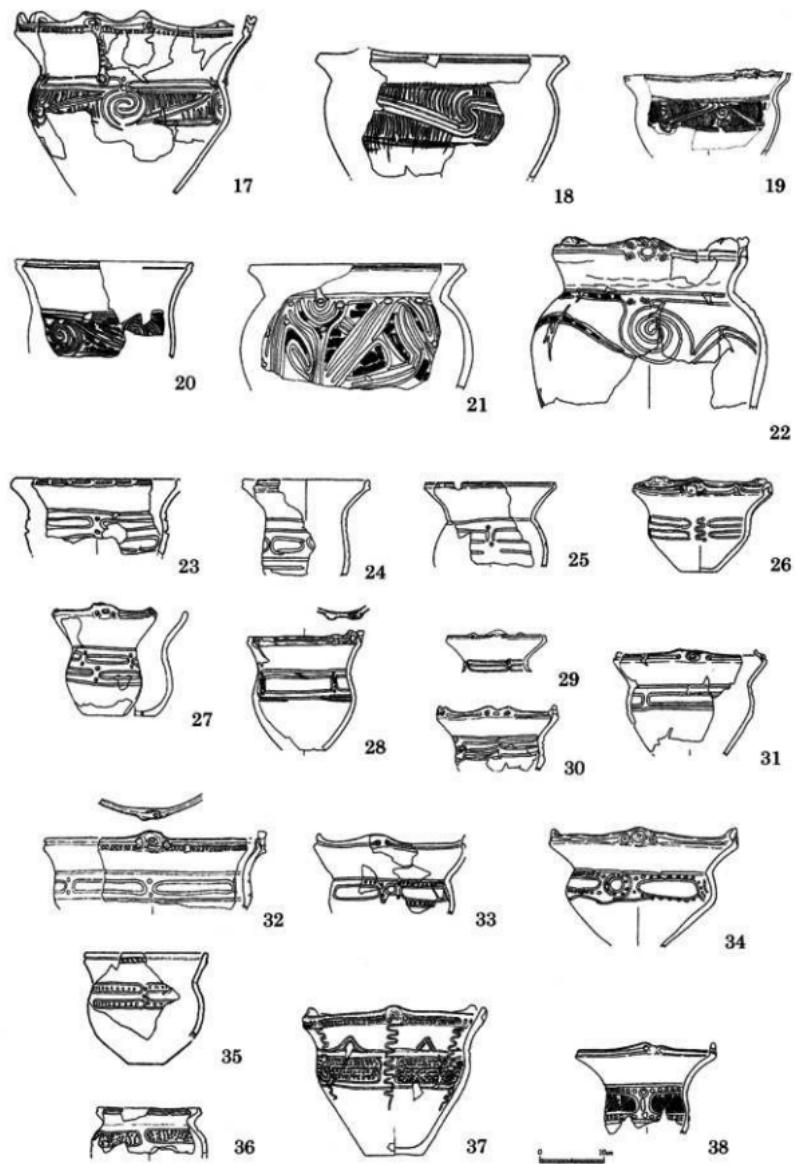
体部文様の区画が磨消繩文で区画されるもので、単位文である渦巻文と連結しているものである。下端の磨消繩文は波状をなしている。口縁部には捩転状の環状把手が付き、古段階の様相をもつが、磨消繩文が均一でないことと単位文との融合が始まっていることなどから編年的位置づけはⅠ式中段階と考えたい。

(6) 方形の横帯文が施文される一群。(第2図-23~38、第3図-39~51)

体部文様に方形文が施文される一群は、出土分布に偏在性をみせ、提示できたなかで、相模川以東から出土しているものはわずかに横浜市南区稻荷山遺跡、保土ヶ谷区椎子峯遺跡、金沢区青ヶ台貝塚の3地点である。

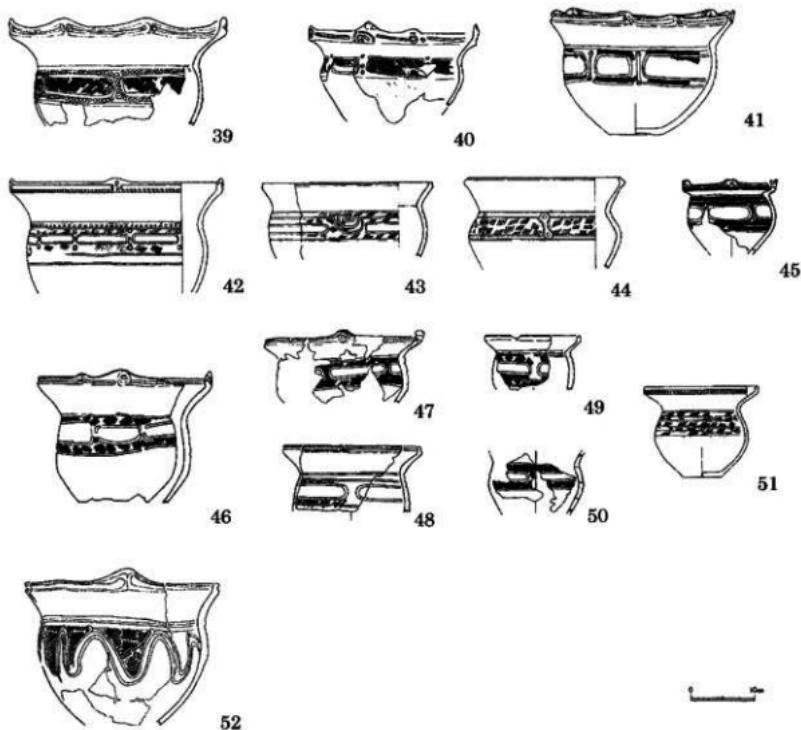
方形文は刺突文が充填されるもの、繩文が充填されるものなどバラエティに富むが、単位文として円文、蛇行懸垂文、盲孔をつなぐ隆縁などが用いられ、この区画文間を方形文が施文されるが、堀之内Ⅰ式の編年の方向性と同じく、こうした単位文が縮小、消失し、方形文のみが施文され、終末を迎えるようである。23~32は沈線による方形文のみが施文される一群である。単位文には盲孔を2孔継位配列したもの(23、25)、盲孔列をつくるもの(28)、盲孔と蛇行懸垂文で構成するもの(26)などがあり、方形文も1段のものと2段のものがあり、体部文様帶の上下端は沈線によって区画される。これが、単位文を消失させ、体部文様区画と方形文だけとなっていくのであろう。型式学的変化は単位文をもち、2段構成の方形文をもつものから単位文が縮小し1段構成となり、さらに区画文を消失して区画は維持しつつも方形文のみとなっていくものと推測される。30などは最末期の様相と考えられ、方形文と上下端沈線区画が一体化して蛇行懸垂文のような形となっている。

33~37は、方形文の区画内に刺突文を充填するものである。37は口縁部から6単位の蛇行沈線を垂下させ、



第2図 横帯文土器集成図(2)

(17:小丸、18、23:万田貝殻坂、19:蓮藤、22、24~26、31、34、38:三ノ宮・下谷戸、20:稻ヶ原、21:三ツ沢、27、30、33:宮ヶ瀬、北原、28:東谷戸、29:下北原、32、37:稻荷山、35:椎子峯、36:久野一本松)



第3図 横帯文土器集成図(3)

(39、47: 池端・椿山、40: 青ヶ台、41、46、48、49: 三ノ宮・下谷戸、42~44、51: 下北原、45: 久野一本松、50: 東谷戸、52: 東向)

頸部との区画線には蛇行懸垂文間に三角形の小区画を描出している。体部文様は下端を区画し、口縁部の蛇行懸垂文の延長上に蛇行懸垂文と入組状の波状懸垂文を交互に施文して単位文をつくり、単位文間に刺突文を充填した方形文を配している。37は32と同じく稻荷山貝塚の同一貝層から出土しており、両者の同時性が保証され、堀之内1式中段階に位置づけられる。このほかに単位文として33、34のような円文が施文される。33は円文と方形文との間に盲孔を配し、34は2単位の沈線で円文を描き、その区画内に刺突文を充填する。両者ともに方形文はその外周にそって刺突文列が描かれる。そして36のように単位文を消失し、刺突文を充填した方形文だけが施文される土器が、新段階に出現するのであろう。

38~51は方形文の区画の内外に繩文が施文されるものである。38、39のように区画内に繩文が施文され、方形文区画の外周に刺突文列が施されるもの、方形文区画内に繩文が施されるもの(40、44)、区画外に繩文がほどこされるもの(41~43、45~50)、方形文の区画内外を問わず、繩文が施文されるもの(51)がある。繩文と刺突文が併用される一群でも方形文間には盲孔が2対上下に配され、単位文としての効果を表出して

おり、明らかに方形文の周囲を巡る刺突文列とは区別される。単位文は盲孔2対のもの(39)、3点のもの(40)、2対の盲孔を隆帯でつなぐもの(41)、44)、あるいは、沈線でつなぐもの(38)、盲孔とその周囲に半円状の区画をつくるもの(43)がみられ、これらの単位文は縄文施文土器に共通する。ここでも単位文の消失ということが変遷のメルクマールとなり、単位文の消失した土器群が46~50の土器群である。消失したものは区画外施文タイプで占められており、縄文施文のタイプは、「区画内縄文+刺突文」→「区画内縄文施文」→「区画外縄文施文」という消長がたどりうる。42~44は伊勢原市下北原遺跡第11号敷石住居址出土の一括資料であり、それぞれのタイプは同時存在が保証されており、明確な「区画内縄文+刺突文土器」が見られず、「区画内縄文施文土器」と「区画外縄文施文土器」で構成されていることは、この間の事情を語るものと考えてよいのではなかろうか。そして51のように方形区画文を無視した縄文施文がなされるようになるのである。

(7) 体部文様区画のみが施文されるもの（第3図-52）

とくに明確な文様モチーフをもたず、体部文様帶の区画だけがなされ、区画内には縄文が施文されるだけのものである。52は文様帶の下端区画を2本単位の沈線による振幅の大きい波状文で区画し、頸部の区画も2本単位の沈線がめぐる。沈線は浅い凹線状となっており、堀之内式終末期の様相を呈しているものと考える。

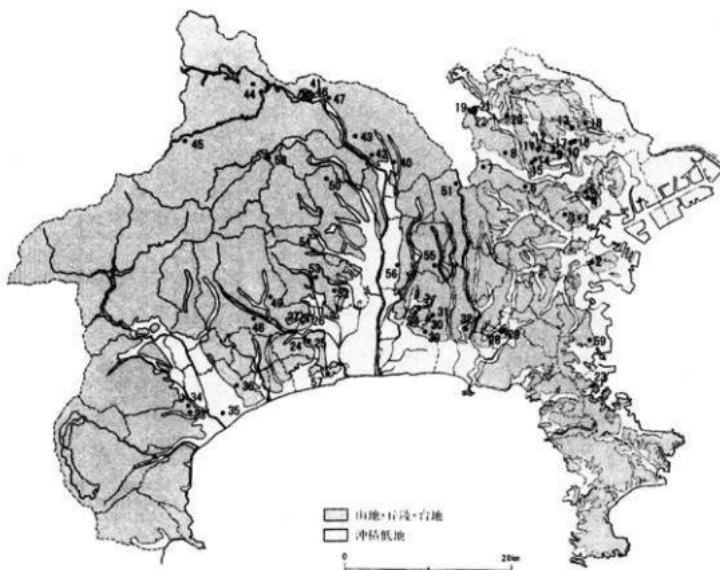
以上、横帶文土器を分類し、各類を概観してきたが、概ね体部文様下端区画を持つ渦巻文基調の一群、入組波状文が横位展開する一群、方形文が展開する一群の三群にまとめられる。これらをそれぞれ石井編年によるCⅢ群の範疇でとらえ、それぞれCⅢ群a類、CⅢ群b類、CⅢ群c類としたい。この類別にこれまでの分類を対応させると、CⅢ群a類は(2)(5)、CⅢ群b類は(3)、CⅢ群c類は、(6)(7)に該当し、(4)はCⅢ群a類、CⅢ群b類の新段階の土器群と位置づけられ、(1)は東北地方十腰内式土器系統の土器とことができよう。それではこうした土器の類別にはどのような地域性が認められるのか遺跡分布のありかたから探ってみたい。

2. 神奈川県内における堀之内式1式期の集落動向

神奈川県内における堀之内式1式期の集落について集成を行った。集成の基準は、堀之内式1式期の集落を構成する柄鏡形（敷石）住居址、掘立柱建物址、墓と考えられる配石、土坑、貯蔵穴と認定できる土坑が発見されている遺跡に限った。また、これらの遺構群は検出されていないが、周辺の調査事例から集落と考えられる遺跡についても集成に加えた。集成に際しては、かながわ考古学財団縄文時代研究プロジェクトチームによる成果である「神奈川県内 後期堀之内式土器出土主要遺跡地名表」を基礎データとして活用させていただき、これに遺漏あるものを追加し、あわせて既刊行の報告書、概報、遺跡発表会発表要旨等によって遺跡の基本データの集成を行い、そのなかで遺物包含層のみ検出の遺跡は集成事例から外した。こうして集成した遺跡は59遺跡72地点である（第4図、第1・2表）。

堀之内式の集落は、河川流域の台地縁辺部に集中する傾向があり、いくつかの集中範囲が認められる。ここでは遺跡の分布をいくつかのグループに分けて観察し、併せて土器様相について考察してみたい。

神奈川県内における集落分布は、おおまかに6つの地域にグルーピングすることが可能かと考えられる。



第4図 神奈川県内の堀之内1式期の主要遺跡分布

すなわち、(1) 横浜市北部と川崎市内を包括する鶴見川流域、(2) 東京湾に面した横浜市南部と三浦半島を含む地域、(3) 藤沢市、茅ヶ崎市などを含む高座丘陵を含む境川、引地川、および小出川・目久尻川流域、(4) 相模原市域を含む相模川上流域、(5) 伊勢原市、秦野市、厚木市などを含む金目川、鈴川、玉川流域、そして(6) 久野丘陵を含む酒匂川、山王川流域があげられる。このうち横帯文土器の出土が顕著なのは(5) 金目川、鈴川、玉川流域であるが、(2) 東京湾に面した横浜市南部から横須賀市北部でも少なからず出土する遺跡が占地する。以下に各地域について一括出土例が、確認された遺跡を含め、遺跡の概観を行い、土器様相からみた地域的特性を抽出してみたい。

(1) 鶴見川流域

鶴見川流域で抽出した遺跡は21遺跡である。このうち鶴見川流域に所在する遺跡が12遺跡、鶴見川支流の早瀬川流域に所在する遺跡が5遺跡、恩田川流域に所在する遺跡が2遺跡である。そのほかに帷子川流域に所在する遺跡が2遺跡ある。これらの遺跡のうち、集落經營がほぼ堀之内1式期で終息を迎える遺跡が13遺跡と最も多く、次に堀之内2式まで続く遺跡が6遺跡、加曾利B式以降継続するものは、わずかに2遺跡である。

1. 三ッ沢貝塚（今泉2010）

帷子川流域に所在する貝塚で、スコットランド出身の医師ニール・ゴードン・マンローが日本ではじめて近代的な調査技法を用いて発掘調査した遺跡として考古学史上著名な遺跡である。貝塚は堀之内1、2式に形成された環状貝塚で、ハマグリ、アサリ、シオフキ、オキシジミ、カガミガイを主体とし、発見遺構とし

ては貯蔵穴と考えられる袋状土坑が確認されている。出土土器は、A群、B群、C群、F群が出土しており、C群に関してCⅡ群が多く出土するなかで十腰内系と考えられる腹部文様をもつ頸部破片も出土している。

3. 錐子峯遺跡（近藤1984）

錐子川流域に所在する遺跡で、柄鏡形（敷石）住居址が12軒、配石墓が2基、貯蔵穴が16基検出されている。横浜新道と第3京浜によって遺跡が分断されており、その際に貝塚も消滅したとされ、本来は貝塚を伴う集落遺跡である。集落は中期後半から經營が始まり、堀之内1式期に終息を迎える。後期の集落は、北東にのびる台地の先端部に集中して発見されており、柄鏡形（敷石）住居址をはじめ、配石墓、貯蔵穴、土器捨て場などが検出されており、高速道路などにより大きく削平は受けているものの、ほぼ後期集落の全域を調査した事例として確認できる。出土土器はA群～F群まで堀之内1式の全器種が出土しており、C群には前述したように十腰内系類似の土器を含め、CⅠ群とCⅡ群が認められるが、顕著なCⅢ群の出土はない。また、堀之内1式後半に顕著となる南関東東部に分布の主体を置くD群、F群も一定量認められており、本地域における南関東東部との流通を示唆する。

4. 篠原大原遺跡（天野2004）・5. 篠原大原北遺跡（山田2007）

篠原大原遺跡、篠原大原北遺跡は、同一遺跡と考えられる。鶴見川流域に所在する遺跡で、貝塚を伴う。貝塚は、遺構内に廃棄された地点貝塚と斜面貝層が存在し、ハマグリ、アサリ主体の貝塚である。発見遺構は、両遺跡あわせて柄鏡形（敷石）住居址30軒、土坑墓7基、貯蔵穴と考えられる土坑26基である。集落の時期は中期中葉～後期前半堀之内式期まで及び、出土遺物は後期中葉加曾利B式まで及ぶ。堀之内1式土器は破片資料が多く、明瞭でないが、A～C、F群が確認でき、C群では単位文をもつCⅢc類が確認できる。

6. 小池遺跡（國平1984）

鶴見川の支流、恩田川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が1軒発見されている。出土遺物は堀之内1式後半の土器群が出土しているのみであり、集落は短期間の經營と思われる。

7. 長津田遺跡住柵遺跡（伊丹1996）

恩田川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址2軒、墓とみられる配石遺構が発見されており、堀之内1式期主体の集落と考えられる。出土している堀之内1式土器はB群、C群、E群が出土しており、C群はCⅡ群が顕著であり、CⅢ群の出土はない。

8. 稲ヶ原遺跡A地点（平子1992）

恩田川流域に所在する。発見された遺構は柄鏡形（敷石）住居址6軒、配石墓1基、貯蔵穴22基である。集落の經營は、中期後半からはじまり後期前半に継続し、後期集落の主体は堀之内2式期である。出土した堀之内1式土器はA群、C群、F群が出土している。C群は前述したCⅢa類が出土しているほか、CⅢb類とみられる削れた入組文が横位展開する土器が認められる。

9. 矢崎山西遺跡（武部2004）

鶴見川支流早瀬川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が10軒発見されている。本遺跡は弥生時代以降奈良・平安時代までの集落が重複しており、撫文時代集落の遺存状況は決してよくないが、集落の時期は堀之内1式期に限られており、該期における拠点集落である可能性が高い。後代の擾乱を受けているために撫文時代の出土遺物は少ないが、中期末の土器から堀之内1式まで確認され、出土している堀之内1式にはA群、B群が認められ、概して古段階の土器が多いようである。おそらく集落の經營は中期末～後期堀之内1式前半段階で終息するのであろう。

10. 西ノ谷貝塚（坂本2003）

鶴見川流域に所在する。前期の貝塚として著名であるが、後期の遺構も柄鏡形（敷石）住居址6軒、掘立柱建物址1棟、土坑墓8、貯藏穴13基が発見されている。集落の經營時期は、堀之内1式から2式に限定される。発見された柄鏡形（敷石）住居址と掘立柱建物址はすべて堀之内1式期に限られており、土坑墓群は堀之内1～2式にわたることから集落は移動しながらも墓域は継続して使用された様相がうかがえる。堀之内1式期の出土資料は破片資料のみで、全形をうかがえるものはないが、A群と考えられる破片が土坑墓から出土している。

11. 華藏台南遺跡（石井1993）

早瀬川によって樹枝状に開析された谷奥の台地上に立地する。集落の經營は、中期末から堀之内2式にかけて継続し、その主体時期は堀之内1式である。発見された堀之内式期の遺構は、柄鏡形（敷石）住居址12軒、掘立柱建物址3棟、土坑墓7基、貯藏穴4基であり、柄鏡形（敷石）住居址は、堀之内2式期を1軒含むほかはすべて堀之内1式期に帰属される。堀之内1式土器は各群が出土しており、9号住居址出土土器群は石井編年4段階の一括出土事例として提示されている（第5図）⁽ⁱⁱⁱ⁾。

9号住居址は、11号住居址と切り合いをもつ住居址で、9号住居址が新しい。張出部の検出はなく、主体部のみが確認されている。1は柱穴脇の床面から出土したA群土器である。「H」状文と蛇行沈線を交互に配し、口縁部直下に刺突文列がめぐる。「H」状文の上半部には斜行沈線が充填され、単位文としての機能が薄れつつも残存する状況を示している。2～16は覆土一括資料である。2もA群土器だが、1よりやや後出の様相を示す。3～6はB群土器である。3、4は縦位沈線間を斜行文で連絡するもので、本地域における主体を占める在地の土器である。5、6はその変異形ともいべきもので、「y」字状のモチーフを連続して描く。7、8は蛇行沈線を重ねて単位文とし、その間を斜行文で連絡するものである。これもB群土器の変異形とみられる。9は方形文を重ねるもの、口縁部が欠失しているため明瞭でないが、CⅢc類であろう。10も面部下半が欠失しているため明瞭でないが、CⅢa類である可能性がある。11～13はCⅡ群である。懸垂文が集合沈線で埋められており、単位文効果が薄れてしまっている。14は梯子状の懸垂文の間を沈線によるモチーフが描かれ、モチーフ内を繩文と集合沈線で埋めている。15は、F群土器。入組懸垂文を単位文として斜行文でその間を連絡する。16はD群土器であり、繩文施文後に沈線による懸垂文が描かれる。

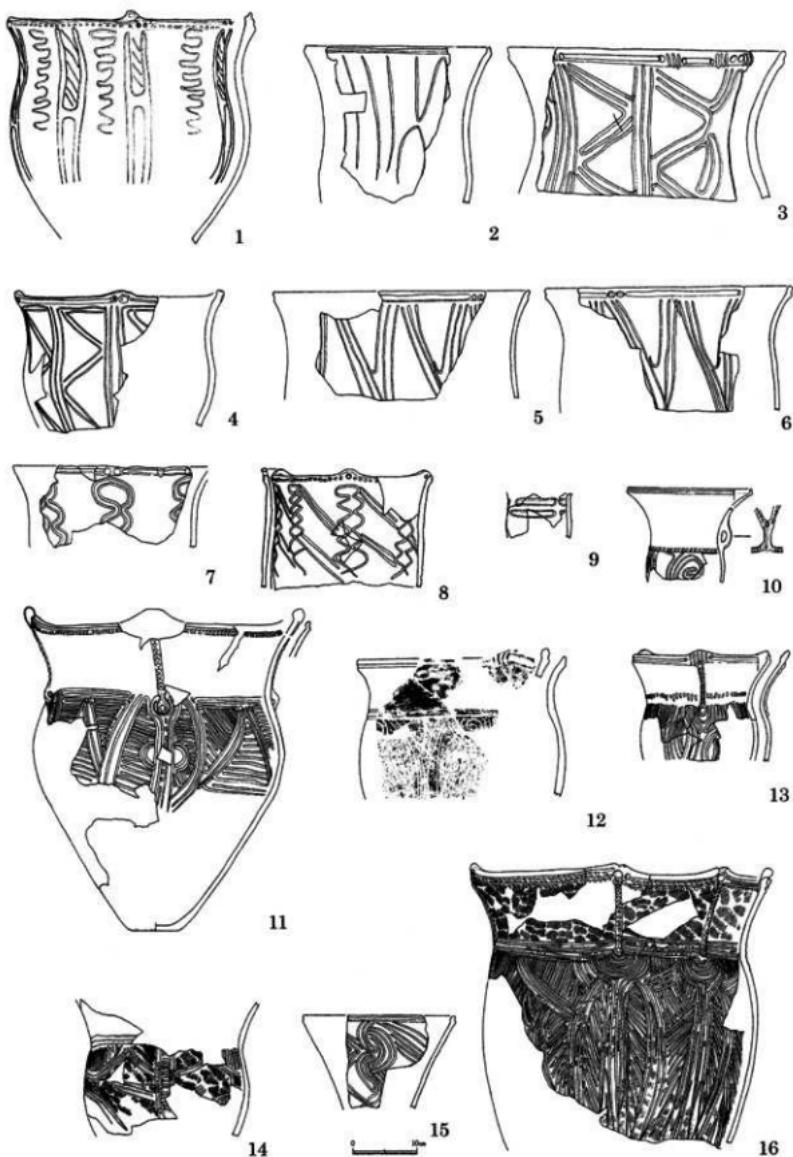
こうした出土事例から鶴見川流域では堀之内1式4段階においてA群、B群の在地の土器に加えて、南関東東部に分布の主体を置くD群、F群土器も組成に加わることが理解されるが、CⅢ群土器は組成のなかでは客体的存在であり、主体的位置を占めないとみられる。

12. 牛ヶ谷遺跡（石井1993）

華藏台南遺跡の南西に位置し、集落の經營時期は堀之内1式主体である。発見された遺構は柄鏡形（敷石）住居址3軒、掘立柱建物址3棟、土坑墓5基、貯藏穴2基である。ほぼ華藏台南遺跡と同時期に継続した遺跡で、土器組成も類似する。

13. 山田大塚遺跡（石井1990）

鶴見川の支流、有馬川流域に所在する。集落の經營時期は中期末～堀之内1・2式にわたり、発見遺構は柄鏡形（敷石）住居址26軒、掘立柱建物址8棟、土坑墓1基、貯藏穴19基である。住居址内から出土した堀之内1式土器はA～C群、F群が認められるが、A、B群は地紋に繩文が採用されている土器が見受けられ、「繩文→沈線」という南関東東部の伝統をもった土器群が散見される。また、C群は懸垂文主体のCⅡ群が



第5図 華藏台南遺跡9号住居址

優勢的に出土している。

14. 川和向原遺跡（石井1995）

鶴見川流域に所在する。集落の經營時期は後期初頭～堀之内1式前半にわたるが、主体時期は堀之内1式後半～2式前半である。発見された後期の遺構は柄鏡形（敷石）住居址20軒、掘立柱建物址19棟、土坑墓13基、貯蔵穴19基である。遺構内から出土した堀之内1式土器はA～C群、F群が認められる。C群は懸垂文主体のCⅡ群が優勢で、そのなかには2本単位の沈線で、口縁部にU字状、胴部にn字状に描いて組み合わせ、単位的に施し、胴部にはその両脇に弧状文を描く個体がみられる。特に縄文の充填ではなく、A群とC群の融合形のような印象を受ける。口唇部には堀之内1式のメルクマールであるところの沈線と盲孔が付される。

15. 原出口遺跡（石井1995）

鶴見川流域に所在し、川和向原遺跡に近接する。集落の經營時期は堀之内1、2式である。発見された後期の遺構は、柄鏡形（敷石）住居址20軒、掘立柱建物址4棟、土坑墓28基、貯蔵穴10基である。遺構内から出土した堀之内1式土器は、A群、D群、F群が認められる。F群土器には横位展開する朝顔形深鉢が認められる。これは20号・21号住居址出土土器群にみられるもので、堀之内1式終末～2式初頭の一括出土事例とされている。このなかに横長のJ字状文沈線文に縄文を充填した縄文帶を3帯配した横位区画文土器とその横位区画文内に三角文状のモチーフを連続させるものがあり、これらは報告によれば、東北地方の十腰内式の三角文に類似することから十腰内系土器との関与が想定されている。

16. 北川貝塚南遺跡（鈴木1997）

早瀬川流域に所在する。集落を構成する柄鏡形（敷石）住居址などの発見はないが、該期の土坑墓が1基発見されているため、集成に加えた。土坑内からは蛇行懸垂文に斜行沈線が連絡したA群土器が出土している。

17. 小丸遺跡（石井1999）

早瀬川流域に所在する。発見された後期の遺構は、柄鏡形（敷石）住居址22軒、掘立柱建物址42棟、土坑墓110基、貯蔵穴50基にも及び、後期の集落經營は堀之内1式期後半～加曾利B1式である。遺構内から出土した堀之内1式土器はA群、B群、D～F群が認められるが、C群は包含層出土で確認できるのみであり、D～F群の南関東東部主体の土器群が、在地のA、B群と拮抗した組成をみせる。

18. 新作小高台遺跡（増子1983）

鶴見川流域に所在する。発見された後期の遺構は、柄鏡形（敷石）住居址1軒である。弥生時代以降の住居址により擾乱を受けており、遺存状況がとても悪く、住居址の帰属細別型式は不明である。堀之内式と考えられる破片資料が出土している。

19. 岡上丸山遺跡（竹石1990）

鶴見川流域に所在する。発見された後期の遺構は、柄鏡形（敷石）住居址6軒、土坑墓1基、貯蔵穴2基である。集落の經營時期は中期末～堀之内1式期である。出土した堀之内1式土器はA～C群、D群、F群が認められ、C群ではCⅡ群が優勢である。

20. 東柿生小学校内遺跡（竹石1995）

鶴見川の支流、片平川流域に所在する。発見された遺構は柄鏡形（敷石）住居址2軒である。集落の時期は堀之内1式期であり、出土した堀之内1式土器はA、B群が主体である。

21. 22. 岡上-4遺跡（呉地1998・2001）

鶴見川流域に所在する。集落を構成する柄鏡形（敷石）住居址の発見はないが、堀之内1式期の貯蔵穴が確認されている。出土した堀之内1式土器はB群のみである。

（2）東京湾沿岸地域

東京湾沿岸地域において抽出できた遺跡は3遺跡にとどまり、2. 稲荷山貝塚（松田2002）、5. 青ヶ台貝塚（佐野ほか1994）、9. 櫻戸貝塚（野内2010）であり、いずれも貝塚である。

稻荷山貝塚では堀之内1、2式の貝層が発見され、貝層中から堀之内式土器が層位的に発掘されている。堀之内1式土器についてみてみると、A～C群、F群については層位的に出土が認められるが、D群、E群については層位的な出土事例が希薄である。C群ではCⅠ群～CⅢ群まで確認され、特にCⅢc類の出土が顕著に認められる。このほかにCⅢb類もF群土器と共に伴して出土している。また、D群、E群に特徴的な織手文が単独で、A群、F群などに描かれる個体が散見され、器種同士の融合が進んでいる状況が認められる。いずれも段階的には石井編年の4段階以降の現象であろう。また、十腰内式に認められる山形文に類似する波状文を3本単位の沈線で描くCⅢ群土器も出土しており、当該地域と十腰内式の関与が想定されるところである。

また、青ヶ台貝塚においてもCⅢc類の出土が認められ、横帯文土器が優勢な出土状況が観察されている。今回は集成に加えなかったが、青ヶ台貝塚の周辺には堀之内1式の貝層を出した称名寺C貝塚が立地していることから、称名寺C貝塚を含め、十腰内式の関与を視野に入れた該期の遺跡群研究が必要となろう。

（3）境川、引地川、および小出川・目久尻川流域

抽出できた遺跡は11遺跡である。その内訳は、境川流域4遺跡、引地川流域1遺跡、小出川流域5遺跡、目久尻川流域1遺跡である。当該地域では、特に小出川流域に後期堀之内～加曾利B式の貝塚が集中する傾向があり、いずれもダンペイキサゴ主体の貝塚となっている。

28. 関谷島ノ神西遺跡（永井1985）

境川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が3軒、貯蔵穴が1基検出されている。住居址の帰属時期は、称名寺式期1軒、堀之内1式期2軒であり、集落の経営時期は後期初頭から堀之内1式期で終息すると考えられる。出土した堀之内1式土器はB群とD群である。B群は縦位の沈線文のみで斜行文ではなく、地紋に織文が用いられていることから南関東東部の影響を受けている土器と考えられる。

29. 東正院遺跡（鈴木1972）

境川流域に所在する。集落の経営時期は堀之内1式～加曾利B式である。発見された堀之内式期の遺構は、柄鏡形（敷石）住居址4軒、貯蔵穴1基である。出土土器はA群とC群がみられる。

30. 遠藤貝塚（寺田1992）

小出川流域に所在する。ダンペイキサゴ、ハマグリ主体の貝塚である。発見された遺構は部分的に検出した住居址4軒、貯蔵穴1基である。出土土器はA～C群、D群、F群がみられる。C群はCⅢa類後半期の資料がやまとまって出土しているほか、CⅢc類中段階の土器が認められる。

31. 遠藤広谷遺跡（戸田2003）

小出川流域に所在する。堀之内1式期の土坑墓2基が発見されている。出土土器はC群、F群であり、C群はCⅡ群が認められる。

32. 善行遺跡（戸田1994、碓井2012）

境川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址4軒、貯蔵穴2基が発見されている。土器片錐が大量に出土

しており、かつては貝塚が所在した。出土土器はB群、C群があり、C群はCⅡ群のみ確認される。

37. 芹沢・久保山遺跡（茅ヶ崎市文化振興財団1997）

小出川流域に所在する。ダンベイキサゴ主体の貝塚である。集落の経営時期は堀之内式から加曾利B式である。

38. 芹沢・行谷貝塚（茅ヶ崎市1987）

小出川流域に所在する。堀之内式に帰属される柄鏡形（敷石）住居址が発見されている。

39. 堤貝塚（堤貝塚資料グループ2000）

ダンベイキサゴ主体の貝塚である。出土土器は、A～C群、F群が認められ、C群には破片資料であるため詳細は不明だが、CⅢ群土器が含まれる。このほかに信越地域に分布の主体をおく「十三本塚北類型」と考えられる深鉢形土器が出土している。

51. 相ノ原遺跡V地点（村澤ほか1997）

境川流域に所在する。調査前に黒土を削平されてしまったため、詳細は明らかにできないが、ピット群、土坑などが検出されており、集落であった可能性が高い。出土遺物は堀之内I式前半期の土器が多く出土している。

55. 上土棚南遺跡（中村ほか1993、矢島ほか1998・2008）

引地川の支流、蓼川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址6軒、掘立柱建物址14棟、土坑墓5基、貯蔵穴1基が発見されている。集落の盛期は堀之内I式後半と堀之内2式～加曾利B1式に分かれる。堀之内I式土器は、A群、C群、F群が認められる。

56. 宮久保遺跡（御堂島ほか1987）

目久尻川流域に所在する。低地に立地し、作業場と考えられる遺跡である。主体時期は堀之内2式～加曾利B1式に求められ、堀之内I式は断片的な出土であり、A群、C群、F群が出土する。C群はCⅡ群のみである。

（4）相模川上流域

抽出できた遺跡は10遺跡16地点である。その内訳は、相模川流域の遺跡が8遺跡、相模川の支流、中津川流域遺跡が2遺跡8地点である。

40. 下溝鳩川遺跡（追1994）

相模川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址8軒、配石墓7基、貯蔵穴6基が発見されている。集落の経営時期は後期初頭～堀之内2式である。堀之内I式土器はA群、C群が確認され、C群はCⅡ群のみである。

41.はじめ沢下遺跡（井辺2009）

相模川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址8軒、配石墓10基が発見されている。集落の経営時期は堀之内I式後半～2式である。集落の盛期は堀之内2式であり、堀之内I式土器は断片的な出土であり、A群、C群を破片資料で確認できるのみである。

42. 当麻亀形遺跡（伊東ほか2002）

相模川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址4軒、貯蔵穴3基確認されている。集落の経営時期は、堀之内式期である。

43. 田名塙田・西山遺跡（土井ほか2002）

相模川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が7軒発見されている。集落の経営時期は、堀之内式期で

ある。出土した堀之内I式土器は、A群とC群がみられ、C群は懸垂文主体のCII群である。なお、胴部の破片資料であるため、詳細は不明ながら、胴部に3本単位の沈線によって横位の波状沈線を描き、沈線間に縄文が施文されるものがあり、十腰内系との関連が注意されるものが、柄鏡形（敷石）住居址より出土している。

44. 寸嵐二号遺跡（吉田ほか1998）

相模川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址1軒、配石墓2基、貯蔵穴16基が発見されている。集落の帰属時期は、堀之内I式期である。出土土器には破片資料であるため、胴部文様が明らかでないが、盲孔を区切りとして沈線による精円区画が横位に配されていると考えられることからCIII群とみられる口縁部破片が出土している。そのほか拓影によりA群、CII群が確認できる。また、住居址周辺にはピットが群をなしで多数検出されており、掘立柱建物址の存在が想起される。少なくとも3棟以上の建物の存在が復元できそうであり、報告者は中期後半の建物址を想定しているが、後期に帰属する建物も存在するのではないかと思われる。

45. 青根馬渡No.2遺跡（平野ほか1999）

相模川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址4軒、配石墓1基が発見されている。住居址の帰属時期はすべて堀之内I式期であるが、称名寺II式を伴う土坑が検出されており、集落の帰属時期は称名寺式終末～堀之内I式期と考えられる。出土した堀之内I式土器はA群、C群が認められ、C群は刺突文を1列充填した方形文がみられることからCIII群c類と考えられる。

46. 烟久保西遺跡（井辺ほか2014）

相模川流域に所在する。集落を構成する柄鏡形（敷石）住居址は発見されていないが、単独礫配置配石が51基、打製石斧を複数土坑内に埋置した埋納遺構が9基が発見されている。これら遺構の細別帰属時期は遺構内からの土器がないために明らかでないが、遺構外出土土器の主体は堀之内式～加曾利B式であり、その範疇に収まるものと考えられる。また、後期の遺物の出土分布が環状を呈しており、当該地域における拠点的な祭祀場空間としての位置づけられる蓋然性が高いであろう。該期に特徴的な環状列石、環状盛土遺構などの祭祀空間との比較検討が必要であろう。出土した堀之内I式土器はA群、C群、F群が認められ、C群は懸垂文が主体のCII群のみで構成される。

47. 大島下台遺跡（大貫2004、小宮山ほか2012）

相模川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址1軒が発見されている。そのほか、CIII群a類に分類された鉢形土器（第1図-4）が、埋甕として出土している。

50. 東谷戸遺跡（戸田1994）

相模川の支流、中津川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址3軒が発見されている。集落の経営時期は堀之内I式期後半に比定される。出土した土器はA群、CIII群が確認され、CIII群はCIII群a類とCIII群c類が出土している。また、3本単位の沈線により入組波状文を描く十腰内系の土器が住居址内から出土している。

58. 宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂遺跡（恩田ほか1998）

相模川の支流、中津川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址1軒が発見されている。住居址の帰属時期は称名寺式後半～堀之内I式前半である。出土した堀之内I式は破片資料のみで、全形を知れるものはない。

58. 宮ヶ瀬遺跡群馬場（No.3）遺跡（高永1996）

相模川の支流、中津川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址2軒が発見されている。住居址の帰属時期は堀之内I式期であり、出土土器はA群、C群が確認される。C群はCⅢ群が主体的に認められ、CⅢ群c類が破片資料ながら住居址内からやまとまって出土している。

58. 宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷（No.8）遺跡（恩田ほか1997）

相模川の支流、中津川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址3軒、貯蔵穴3基が発見されている。集落の經營時期は堀之内式から加曾利B式にわたるが、本地点の住居址の帰属時期は堀之内I式の範囲に收まり、堀之内式期の拠点集落とみられる。出土した堀之内I式土器は、A～C群が認められ、C群はCⅡ群とともにCⅢ群のCⅢ群a類が安定的に組成され、CⅢ群c類もみられる。

58. 宮ヶ瀬遺跡群北原（No.9）遺跡（市川ほか1994）

相模川の支流、中津川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址8軒が発見されている。集落の經營時期は堀之内I式から2式にわたり、1式期が主体を占める。出土した堀之内I式土器は、A～C群、F群が認められるが、住居址内から出土したものはCⅢ群c類が主体を占める。遺構外から出土したC群はI～Ⅲ群の各種が出土している。

58. 宮ヶ瀬遺跡群北原（No.11）遺跡（市川ほか1994）

相模川の支流、中津川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址1軒が発見されている。住居址の帰属時期は堀之内I式である。住居内出土土器は、D群が認められる。そのほか埋設土器にCⅢ群c類中段階の土器が使われているほか、A群、CⅡ群土器利用されている。

58. 宮ヶ瀬遺跡群ナラサ遺跡（上田ほか1991）

相模川の支流、中津川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址2軒、配石墓4基が発見されている。住居址の帰属時期は堀之内I式である。出土土器はA～C群が確認され、C群はCⅠ、Ⅱ群が認められ、古段階の土器が多く出土している。

（5）金目川、鈴川、玉川流域

抽出できた遺跡は10遺跡である。その内訳は、金目川流域の遺跡が7遺跡、花水川の支流、鈴川流域の遺跡が2遺跡、玉川流域の遺跡が1遺跡である。

24. 原口遺跡（長岡2002）

金目川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址5軒、貯蔵穴2基が、発見されている。後期集落の經營時期は称名寺式～加曾利B式まで継続し、堀之内2式～加曾利B1式が主体時期である。出土した堀之内I式はA群、C群、F群が認められるが、C群土器が最も卓越する。C群土器はCⅡ群が主体を占めるが、CⅢ群のCⅢ群b類（第1図-16）が住居内より出土している。

25. 上吉沢市場遺跡群A地区（高杉2000）

金目川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址2軒、貯蔵穴3基が、発見されている。集落の時期は堀之内I～2式と考えられる。住居内から出土した堀之内I式土器は、A群とC群土器である。破片資料のためC群の細別型式は不明である。包含層出土の土器ではCⅡ群が主体的に出土している。

26. 真田北金目遺跡群15E区（川端2011）

金目川流域に所在する。水場遺構4基、礎敷き水場状遺構2基が発見された。出土土器は称名寺式から加曾利B式までわたり、該期の水場遺構として評価されている。出土した堀之内I式土器は、破片資料であるために詳細は不明だが、A群、B群、D群が確認される。

27. 王子ノ台遺跡（常木ほか1991、秋田ほか1995）

金目川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が22軒発見されている。出土遺物は称名寺式～加曾利B2式にまでわたるが、詳細は不明である。

48. 今泉峰遺跡（増田1998）

金目川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が2軒発見されている。集落の時期は堀之内1式である。出土土器はF群土器が確認される。

49. 寺山遺跡（後藤1996、日野ほか1985）

金目川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址4軒、後期中葉の配石墓約25基が発見され、集落の経営時期は中期後半～後期中葉にわたる。他地点で確認された包含層出土土器ではA群、C群の出土が確認されるが、破片資料であるため、細別型式は不明である。

52. 池端・椿山遺跡（小川ほか2004）

鈴川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址3軒が、発見されている。後期集落の帰属時期は堀之内1式期が主体となっており、住居址出土の堀之内1式土器の組成はA～C群、F群が認められる。しかし、遺構外出土土器では加曾利B1式土器が定量出土しており、後期集落の消長は後期中葉まで継続する可能性が高い。

J9号竪穴住居址は、部分的な検出であるものの石垣埋廬炉をもち、柄鏡形（敷石）住居址として理解されるもので、覆土中には後期の包含層が形成され、さらに堀之内2式以降の所産と考えられるJ1号敷石住居址が構築される。J9号住居址の覆土中から出土した土器群は、J1号敷石住居址によってパックされていることから当該地域の該期の一括出土事例として評価される（第6図）。

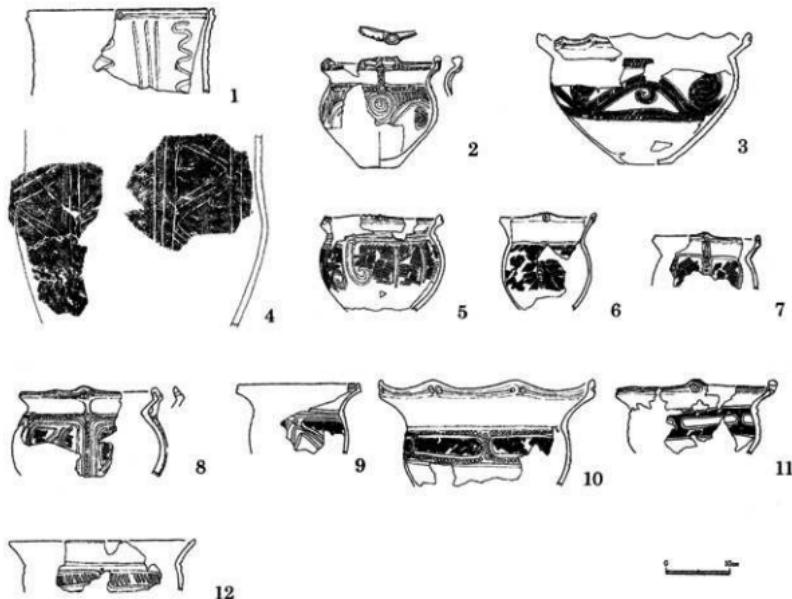
1はA群土器であり、3本単位の縦位沈線と蛇行沈線が交互に配される。4は、B群土器である。3本単位の縦位沈線に斜行沈線が連絡している。3は、前述したとおり、在地化した十腰内系土器である。2、5～12はC群土器である。2は渦巻文を基調とするCⅠ群土器である。渦巻文が集合沈線の充填により単位文効果が希薄になっている。5～8は、懸垂文主体のCⅡ群土器である。9～12はCⅢ群土器である。9は、区画内に縄文を充填した逆三角文が横位に展開し、その間に区切り文として盲孔を配し、2本単位の三角文を配して、単位文としての効果を出している。10～12はCⅢ群c類としたもので、方形文の区画内に縄文を充填するもの、区画外に縄文を充填するもの、区画内に集合沈線を充填するものとバラエティに富むが、すべて縦位に2対の盲孔を方形文の間に配して単位文の効果を表出している。方形文土器に未だ単位文の痕跡が遺存している状況とCⅠ群土器の渦巻文が希薄となっているものの単独の渦巻文も施文され、完全に埋没していない状況から石井編年4段階の土器群と考えてよいであろう。

53. 三ノ宮・下谷戸遺跡（松田ほか2000）

鈴川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址5軒、配石墓4基、貯藏穴が発見されている。集落の経営時期は中期末から加曾利B式まで及び、堀之内式期の住居址は堀之内2式期が主体である。出土した堀之内式土器はA～C群が認められるが、C群が安定的な組成を示す。C群はCⅠ～CⅢ群の各群が出土しているが、CⅢ群c類が主体的な位置を占める。

54. 下北原遺跡（鈴木ほか1977）

玉川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址10軒、配石墓14基が発見されている。後期集落の経営時期は堀之内1式から加曾利B式まで及び、堀之内式期の住居址は、堀之内1式が主体である。出土した堀之内1式土器は、A～C群、F群が認められるが、C群はCⅢ群が優勢な組成を示す。



第6図 池端・椿山遺跡 J9号住居址

57. 大磯小学校遺跡（鈴木ほか1976）

金目川流域に所在する。配石墓が2基発見されている。配石墓の帰属時期は堀之内I式～加曾利B式まで及ぶ。出土した堀之内I式土器はA～C群が認められ、C群はCⅢ群が優勢である。

(6) 酒匂川、山王川流域

抽出できた遺跡は4遺跡である。

33. 久野北側上遺跡（小林2003、鯉淵2013）・久野北側下遺跡（小林1996、小池2004）・久野北久保下遺跡（小池2004）

山王川流域に所在する。久野北側上遺跡・久野北側下遺跡・久野北久保下遺跡は同一遺跡と考えられ、堀之内I式から晩期前半まで継続した拠点集落と考えられる。発見された遺構は、柄鏡形（敷石）住居址15軒、土坑墓2基、貯藏穴8基である。出土した堀之内I式土器はC群が優勢な組成を示すが、A群、D群、F群も安定した出土状況を示す。C群はCⅠ群、CⅡ群が主体的位置を占め、CⅢ群は客体的位置である。

34. 久野一本松遺跡（戸田2002）

酒匂川の支流、狩川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が6軒発見されている。後期集落の經營時期は堀之内I式期であり、その主体時期は堀之内I式期である。出土している堀之内I式土器の組成は、A群、B群も組成するが、優勢的に占めるのは、C群、F群である。C群はCⅠ～CⅢ群まで各群が確認される。

35. 御組長屋遺跡（小林2001）

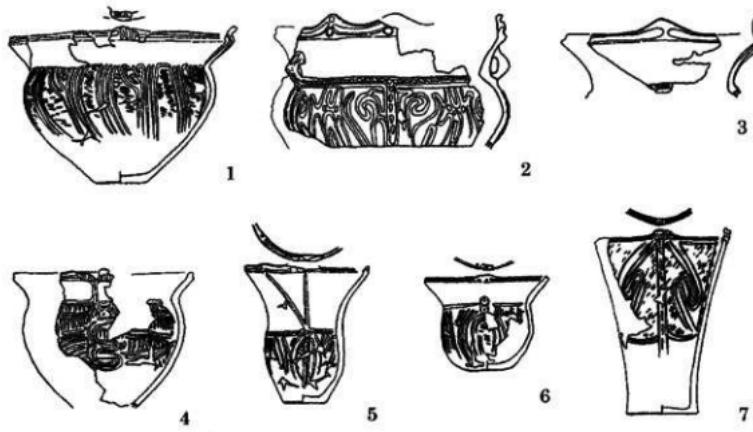
酒匂川流域に所在する。堀之内1式期の柄鏡形（敷石）住居址が2軒、土坑墓1基が発見されている。集落の経営時期は堀之内1式から加曾利B式まで及ぶが、それぞれ単独で住居址は存在し、核家屋の様相を示す。出土した堀之内1式は破片資料が多く、全容を窺うことが難しいが、CII群に混ざって南関東東部のD群、E群が少なからず組成するようである。

36. 曾我谷津岩本遺跡（小池2010）

酒匂川流域に所在する。柄鏡形（敷石）住居址が6軒発見されている。住居址の帰属時期は中期後半から堀之内1式期まで及び、遺構外からも堀之内2式以降の土器が出土していないことから、集落の経営時期は堀之内1式期で終息するものと思われる。

J1号敷石住居址は、激しく重複する住居址群のなかで最も新しい住居址である。出土遺物は炉址と覆土から出土しているが、覆土出土のものは下層から出土しているものが多く、一括性の高いものとして評価できる（第7図）。

1～3は炉址出土土器である。これに無文の組成深鉢が伴う。1、2はCII群に属し、懸垂文が主体となる土器で、1では懸垂文間に縦文が充填される。4～6もC群に分類されるもので、4はCI群、5、6はCII群であろう。7は朝顔形深鉢でF群土器である。刺突文列を充填した2本単位の縦位沈線で区画され、腹部文様下端もやや湾曲した弧線で限られ、区画内には縦位に流れる入組波状文が配される。堀之内1式新段階に比定されよう。4も渦巻文が形骸化し、S字状の入組文となっており、その間を2本単位の沈線で連絡し、さらに集合沈線が充填され、単位文の埋没が図られていることから堀之内1式新段階の資料としてよいであろう。これらのことから本住居址出土土器群は堀之内1式新段階の一括資料として理解できる。



第7図 曾我谷津岩本遺跡 J1号敷石住居址

まとめ

以上、ながながと各地域の集落と出土した堀之内I式土器の傾向について概観してきたが、最後に神奈川県内におけるC群土器の様相について整理し、堀之内I式期後半の地域性についての展望を述べてまとめたい。

まず、C群土器の様相については以下のような事象が確認できる。

- ① 鶴見川流域ではCⅠ群、CⅡ群が優勢であり、CⅢ群は希薄な分布を示す。
- ② 横浜市南部から三浦半島を含めた東京湾沿岸域と伊勢原市を中心とした金目川、鈴川、玉川流域ではCⅢ群が優勢的に分布し、CⅠ群は希薄な状況である。
- ③ 相模川上流域ではCⅡ群が優勢的に分布するが、客体的にCⅢ群、および十腰内系が在地化したもののが認められる。
- ④ 境川、引地川、および小出川・目久尻川流域でもCⅡ群が優勢的であるが、客体的にCⅢ群、D群が存在する。
- ⑤ 酒匂川、山王川流域ではCⅡ群とD群が安定的に分布する。

これを文化事象として考えると、横帯文土器の分布の中心と考えられる伊勢原市を中心として金目川、鈴川、多摩川流域とやや分布の密度が濃い横浜市南部から三浦半島を含めた東京湾沿岸域をa群地域圏として前者をaⅠ群、後者をaⅡ群とし、CⅠ群とCⅡ群が組成の中心となる鶴見川流域をb群地域圏、CⅡ群が優勢的な組成を示す相模川上流域をc群地域圏、南関東東部と親縁的な要素をもち、CⅡ群が優勢的な組成をもつ酒匂川、山王川流域をd群地域圏とし、それぞれ南関東南西部における小文化圏として類型化できよう。このなかでaⅠ群地域圏は十腰内系土器との親縁関係が最も強いと考えられ、伊勢原市八幡台遺跡では搬入品と考えられる十腰内式土器と在地の堀之内I式終末の朝顔形深鉢が、敷石住居址内から共伴するなど、十腰内系土器が直接関与した地域と考えられる。こうした事象とCⅢ群b類とCⅢ群c類に分類した入組波状文や方形文など十腰内式土器との関連性がうかがえる土器が本地域に多く分布するという事実は、十腰内系土器と方形文土器の関係性の強さを示すものと考えられる。AⅡ群地域は、検討できた遺跡が少ないが、I遺跡の中に占めるCⅢ群c類の出土量は比較的安定しており、福荷山貝塚では同一貝層中よりCⅢ群c類と在地のB群土器、CⅢ群b類とF群土器の共伴が確認され、これらの土器が、堀之内I式期の後半段階に一般的であった蓋然性は高いといえよう。

これに対して、b群地域圏では渦巻文主体のCⅠ群と懸垂文系のCⅡ群の出土が目立っており、それに比べてCⅢ群の出土は希薄である。こうした状況は、d群地域圏でも同様であり、この地域ではa群地域圏と地理的に近いためか方形文土器の出土もみられるが、主体はCⅡ群土器を中心に組成し、また、客体的存在と考えられるが、南関東東部に主体的分布をもつD群、E群土器が組成に加わっている。c群地域圏についてもCⅡ群土器が組成の中心であり、CⅢ群の出土は限定的である。しかし、CⅢ群a類のような渦巻文を残す土器群は、当地域に顕著である。これは、信州系の小仙塚類型に近縁的であり、中部高地からの関与を考える必要があろう。しかし、D群、E群といった南関東東部出自の土器はほとんど認められない。

以上のことを総合すると、十腰内系土器の関与が顕著なa群地域圏と懸垂文、渦巻文系の小仙塚類型を出し、南関東東部の関与が知られるb、d群地域圏、中部高地との関係性が強いと考えられるc群地域圏に大別される。これら3群の地域圏は、対立的に存在したのではなく、それぞれの地域圏において隣接する地域

圏の土器群も客体的であり、出土している状況から互いに交流しつつ個別地域性を残存させながら、次代の堀之内2式期へと齊一化の方向に向けて文化融合していくものと考えられる。つまり、各地域圏で東北地方、房総半島、中部高地など他地域の間交を受けつつ土器組成を成立させていくが、そこで変異して在地化した土器群は当該地域のみで終息するのではなく、隣接する地域圏へと波及し、さらに大文化圏として統合されていき、後期中葉の洗練された文化様態へと変遷していくのである。

註

- (1) 馬目順一1968『小名浜一小名浜周辺の遺跡調査報告集一』いわき市教育委員会
- (2) 石井寛1982『南関東西南部（多摩丘陵以南）』『開館10周年記念 シンポジウム堀之内式土器資料集—各地の堀之内式土器とその変遷』
- (3) 本稿でも、基本的に石井編年の堀之内1式土器の6分類を踏襲し、下北原類型をA群、荏田類型をB群、小仙塚類型をC群、矢作類型をD群、曾谷類型をE群、堀之内類型をF群との呼称を用いるが、C群については、C1群のなかで渦巻文構成が1段となり、横位構成が強調される一群を分離し、横帯文の枠組みのなかで考え、類別を行う。

引用・参考文献

- 秋田かな子ほか 1995 『東海大学校地内遺跡調査団報告5』 東海大学校地内遺跡調査団
- 阿部芳郎 1988 「堀之内1式土器の構成と変遷」『信濃』第40巻第4号
- 天野賢一・宮井香 2004 『藤原大原遺跡 鶴原団地（先工区）建て替え事業に伴う発掘調査』かながわ考古学財団 調査報告175 財団法人かながわ考古学財団
- 石井寛 1993 『牛ヶ谷遺跡・華藏台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIV (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 石井寛 1995 『川和向原遺跡 原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIX (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
- 石井寛 1999 『小丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25 (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 石井寛 2008 『華藏台遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告41 (財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 石井寛ほか 1990 『山田大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X I 横浜市埋蔵文化財センター
- 伊丹徹ほか 1996 『長津田遺跡群II』かながわ考古学財団調査報告12 財団法人かながわ考古学財団
- 伊丹徹ほか 1997 『長津田遺跡群III』かながわ考古学財団調査報告14 財団法人かながわ考古学財団
- 市川正史・井関文明 2000 『上土種南遺跡 第4次調査 萩川改修事業に伴う発掘調査』かながわ考古学財団調査報告109 財団法人かながわ考古学財団
- 市川正史・恩田勇 1994 『宮ヶ瀬遺跡群IV 北原（No.9）遺跡（2）北原（No.1）遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21 神奈川県立埋蔵文化財センター

- 市川正史・鈴木次郎・吉田政行 1998 「宮ヶ瀬遺跡群XV 北原(No10・11北)遺跡 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査」かながわ考古学財団調査報告41 財団法人かながわ考古学財団
- 伊東秀吉・大坪宣雄・長澤邦夫・小林克利・守屋照代 2002 「当麻龜形遺跡」相模原市都市計画道路嶺之内当麻線道路改良事業地内遺跡発掘調査
- 井辺一徳・小林晴生・相良英樹 2009 「はじめ沢下遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道(さがみ縦貫道路)建設事業に伴う発掘調査」かながわ考古学財団調査報告236 財団法人かながわ考古学財団
- 井辺一徳・相良英樹ほか 2014 「細久保西遺跡 一般国道468号(さがみ縦貫道路 相模原市城山地区)建設事業に伴う発掘調査」かながわ考古学財団調査報告302 公益財団法人かながわ考古学財団
- 今泉克己ほか 2010 「横浜市神奈川区三ツ沢貝塚 沢渡55番80号地点の調査」(株)有明文化財研究所
- 上田薰・長岡文紀 1991 「宮ヶ瀬遺跡群II ナラサス遺跡 ナラサス北遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 碓井三子・杉本靖子 2012 「神奈川県藤沢市 善行遺跡第2次調査 発掘調査報告書」有限会社吾妻考古学研究所
- 大塚健一・小西絵美 2008 「下北原遺跡II 伊勢原調整池築造工事に伴う発掘調査」かながわ考古学財団調査報告222 財団法人かながわ考古学財団
- 大賀英明 2004 「I 大島下台(相模原市No95)遺跡調査報告」「平成16年 相模原市文化財年報」相模原市教育委員会
- 大賀英明・内田洋隆 2002 「当麻龜ノ甲・西原遺跡」相模原市埋蔵文化財調査報告第26集 相模原市教育委員会
- 小川岳人・井辺一徳 2004 「池端・椿山遺跡 緊急地方道路整備事業(主要地方道路横浜・伊勢原線)に伴う発掘調査」かながわ考古学財団調査報告165 財団法人かながわ考古学財団
- 恩田勇・近野正章・吉田政行 1998 「宮ヶ瀬遺跡群XVI 久保ノ坂(No.4)遺跡 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査」かながわ考古学財団調査報告42 財団法人かながわ考古学財団
- 加藤勝仁・小川岳人・伊丹徹 2000 「川尻遺跡II 谷ヶ原浄水場内事業に伴う発掘調査」かながわ考古学財団調査報告69 財団法人かながわ考古学財団
- 加藤勝仁・小西絵美・菊川泉・井闇文明 2009 「上行寺裏遺跡(瀬戸14番地やぐら群)III 平成19・20年度金沢八景南地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査」かながわ考古学財団調査報告241 財団法人かながわ考古学財団
- 加納実 2003 「縄文時代後期編之内I式同期器の系統分析」「千葉市立加曾利貝塚博物館紀要」第30号
- 川上久夫・野内秀明・鶴持輝久・小暮慶明 1997 「間口東洞穴遺跡 急傾斜地防災工事にともなう緊急調査」松輪間口東海鮫洞穴遺跡調査団
- 川端清倫ほか 2011 「15E・F・G、37、38区」「神奈川県平塚市 平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書8 15E・F・G・37、38、39、40、41A・B、48、50A・C・D、51A~E、52A・B区 第1分冊 平塚都市計画事業真田・北金目特定土地区画整理事業に伴う調査報告」「平塚市真田・北金目遺跡調査会
- 國平健三 1984 「小池遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告7 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 異地英夫 2001 「神奈川県川崎市麻生区 間上-4遺跡第2地点発掘調査報告書」「間上-4遺跡発掘調査団
- 異地英夫ほか 1998 「間上-4遺跡発掘調査報告書」「間上-4遺跡発掘調査団
- 小池聰ほか 2010 「神奈川県小田原市 曽我谷津岩本遺跡第1地点」(株)盤古堂
- 小池聰・山田仁和・柏谷隆・阿曾正彦 2004 「久野北側下遺跡第II・IV・V地点 久野北久保下遺跡第I地点」小田原市文化財調査報告書第123集 小田原市教育委員会

- 鰐河義紀ほか 2013 「神奈川県・小田原市 久野北側上遺跡第Ⅱ地点発掘調査報告書」有限会社鎌倉遺跡調査会
- 香村統一ほか 2002 「相原八幡前遺跡」相模原市相原地区遺跡発掘調査団
- 後藤喜八郎ほか 1996 「No19寺山遺跡発掘調査報告書」No19寺山遺跡発掘調査団
- 小林義典 1996 「久野北側下遺跡第Ⅲ地点 発掘調査報告書」玉川文化財研究所
- 小林義典 2003 「久野北側下遺跡第Ⅰ地点 久野北側上遺跡第Ⅰ地点 久野北久保遺跡第Ⅱ・Ⅳ地点・市道2421号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査」小田原市文化財調査報告書第114集 小田原市教育委員会
- 小林義典・小山裕之・中山豊・香山達郎 2001 「御組長屋遺跡 第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点 発掘調査報告書 都市計画道路小田原早川線街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」都市計画道路小田原早川線改良工事遺跡発掘調査団
- 小宮恒雄・坂本彰 1995 「古梅谷遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XVII (財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター・横浜市教育委員会
- 小宮山友康ほか 2012 「神奈川県相模原市緑区 大島下台遺跡 第4地点～宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」大成エンジニアリング株式会社
- 近藤英夫ほか 1984 「帷子峯遺跡 横浜新道三ッ沢ジャンクション建設予定地区遺跡発掘調査報告書」横浜新道三ッ沢ジャンクション遺跡調査会
- 財団法人茅ヶ崎文化振興財団 1997 「第8回 茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨」財団法人茅ヶ崎市文化振興財団
- 坂本彰ほか 2003 「西ノ谷貝塚」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告33 (財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター
- 坂本彰ほか 2007 「北川貝塚」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告39 (財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター
- 追和幸・相原俊夫・麻生順司・玉川久子 1994 「神奈川県相模原市下溝塙川遺跡発掘調査報告書」下溝塙川遺跡発掘調査団
- 佐野大和・西田泰民 1994 「青ヶ台貝塚発掘調査概報」
- 宍戸信悟・宮坂淳一・松田光太郎・三瓶裕司 2000 「三ノ宮・下谷戸遺跡 (No14) II 東海自動車道 (東名高速道路) 厚木・大井松田間拡幅工事に伴う調査[7]」かながわ考古学財団調査報告76 財団法人かながわ考古学財団
- 縄文セミナーの会 2012 「第25回縄文セミナー 縄文後期土器研究の現状と課題」
- 市立市川考古博物館 1983 「シンポジウム堀之内式土器の記録」
- 鈴木一男・池田彦三郎 1976 「大磯小学校遺跡」大磯町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 大磯町教育委員会
- 鈴木一男ほか 1986 「城山遺跡Ⅱ」大磯町文化財調査報告書 第26集 大磯町教育委員会
- 鈴木重信・鹿島保宏・橋本昌幸 1997 「豊屋の上遺跡・西谷戸の上遺跡・北川貝塚南遺跡 第三京浜道路 (改築) 新港北インターチェンジ (仮称) 埋蔵文化財発掘調査報告書」(財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財センター・日本道路公団
- 鈴木次郎・市川正史・近野正幸 1999 「宮ヶ瀬遺跡群XVII 馬場 (No.6) 遺路 (2) 北原 (No.9) 遺跡 (3) 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査」かながわ考古学財団調査報告51 財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木次郎ほか 1995 「宮ヶ瀬遺跡群V」かながわ考古学財団調査報告4 財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木保彦 1972 「東正院遺跡調査報告 神奈川県鎌倉市関谷所在の縄文遺跡について」神奈川県教育委員会
- 鈴木保彦ほか 1977 「下北原遺跡 伊勢原市下北原所在の縄文時代配石遺構の調査」神奈川県埋蔵文化財調査報告

14 神奈川県教育委員会

- 高杉博章・小山裕之・中山豊・佐々木竜郎 2000 『上吉沢市場地区遺跡群 発掘調査報告書』平塚市・上吉沢市場地区遺跡群発掘調査団
- 流澤亮・浅賀貴廣ほか 2012 『相模原市南区当麻鬼ノ甲遺跡 第2地点発掘調査報告書』株式会社盤古堂
- 竹石健二ほか 1990 『神奈川県川崎市麻生区 岡上丸山遺跡発掘調査報告書』川崎市教育委員会
- 竹石健二ほか 1995 『川崎市東柿生小学校内遺跡発掘調査報告書』東柿生小学校内遺跡発掘調査団・川崎市教育委員会
- 武部喜充ほか 2004 『矢崎山西遺跡発掘調査報告書』山武考古学研究所
- 茅ヶ崎市 1987 『写真集茅ヶ崎のうきょう』
- 近野正幸・恩田勇ほか 1997 『宮ヶ瀬遺跡群X・III』かながわ考古学財団調査報告19 財団法人かながわ考古学財団
- 堤貝塚資料整理グループ 2000 『神奈川県指定史跡 堤貝塚-1979年実施の範囲確認調査出土品資料整理報告-』茅ヶ崎市文化財資料集第13集 茅ヶ崎市教育委員会
- 常木見ほか 1991 『東海大学校地内遺跡調査報告2』東海大学校地内遺跡調査団
- 寺田兼方・澤田大多郎 1992 『遠藤貝塚(西部217地点)』藤沢市西部開発事務局・藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団
- 土井永好・長谷川宙輝 2002 『田名塙田・西山遺跡』相模原市埋蔵文化財調査報告第27集 相模原市教育委員会
- 戸田哲也・麻生順司・中山豊・坪田弘子 2003 『遠藤山崎・遠藤広谷遺跡 発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 戸田哲也・迫和幸・中山豊 1994 『東谷戸遺跡発掘調査報告書』上荻野東部土地地区画整理事業事業区域内遺跡発掘調査団
- 戸田哲也・中村哲也・麻生順司・小林明美・石川真紀・金子浩昌・松島義章 2007 『万田貝殻坂貝塚(万田遺跡第9地点)発掘調査報告書』平塚市・玉川文化財研究所
- 戸田哲也ほか 1994 『神奈川県藤沢市 善行遺跡発掘調査報告書』善行遺跡発掘調査団
- 戸田哲也ほか 1998 『多摩区No.61遺跡(宿河原縄文時代低地遺跡)発掘調査報告書』多摩区No.61遺跡発掘調査団
- 戸田哲也・吉田浩明・麻生順司・中山豊 2002 『久野源訪ノ原遺跡群I・久野一本松・久野天野敷・久野坂下塙遺跡』市道0036号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査-小田原市文化財調査報告書第101集 小田原市教育委員会
- 富永樹之 1996 『宮ヶ瀬遺跡群VII』かながわ考古学財団調査報告9 財団法人かながわ考古学財団
- 永井正憲ほか 1985 『関谷島ノ神西遺跡発掘調査報告書』関谷島ノ神西遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会
- 長岡文紀 2002 『原口遺跡III 縄文時代・農業総合研究所建設に伴う発掘調査』かながわ考古学財団調査報告134 財団法人かながわ考古学財団
- 中川真人ほか 2005 『国指定史跡川尻石器時代遺跡確認調査報告書1』城山町教育委員会
- 中村喜代重・小滝勉・阿部芳郎 1993 『吉岡塚ノ内横穴墓群 上土櫻遺跡(縄文時代編) 上土櫻南遺跡』綾瀬市埋蔵文化財調査報告3 綾瀬市教育委員会
- 服部清道・寺田兼方 1964 『西富貝塚発掘調査報告』藤沢市文化財調査報告書第1集 藤沢市教育委員会
- 浜田晋介ほか 2000 『下原遺跡 縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代前期の集落址の調査』川崎市市民ミュージアム考古学叢書4 川崎市市民ミュージアム
- 日野一郎・伊東秀吉・杉山博久 1985 『寺山遺跡』『秦野市史 別巻考古編』秦野市
- 平子順一・橋本昌幸 1992 『稻ヶ原遺跡A地点発掘調査報告』横浜市立さつきが丘小学校建設に伴う埋蔵文化財調

- 査報告』横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 平野裕久ほか 1999 「道志導水路開削遺跡」かながわ考古学財団調査報告59 財団法人かながわ考古学財団
- 増子章二ほか 1983 「新作小高台遺跡発掘調査報告書」川崎市教育委員会
- 増田精一 1998 「今泉遺跡群」今泉地区遺跡群発掘調査団
- 松田光太郎・大塚健一・中村賢太郎 2002 「稲荷山貝塚 根岸米軍(11)法面整備工事に伴う発掘調査」かながわ考古学財団調査報告131 財団法人かながわ考古学財団
- 御堂島正・長岡文紀 1987 「宮久保遺跡Ⅰ 県立綾瀬西高等学校建設にともなう調査」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 村上吉正・吉垣俊一 1998 「東向遺跡(No.33) 第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告5」かながわ考古学財団調査報告31 財団法人かながわ考古学財団
- 村上吉正・吉垣俊一・谷口肇 1997 「中里遺跡(No.31) 西大竹上原遺跡(No.32) 第一東海自動車道厚木・大井松田間改築事業に伴う調査報告4」かながわ考古学財団調査報告30 財団法人かながわ考古学財団
- 村澤正弘・細井佳浩・小池聰 1997 「相ノ原遺跡第V地点第4次調査(大和市No.207遺跡)」大和市文化財調査報告書65大和市教育委員会
- 矢島國雄・阿部芳郎・小瀧勉・井上洋一 1998 「上土棚南遺跡第3次調査」綾瀬市埋蔵文化財調査報告5 綾瀬市教育委員会
- 矢島國雄・小瀧勉・高橋毅・初鹿野博之 2008 「上土棚南遺跡 第5次～第7次調査の記録」綾瀬市埋蔵文化財調査報告6 綾瀬市教育委員会
- 野内秀明 2010 「5 横戸貝塚」「新横須賀市史」横須賀市
- 山田仁和ほか 2007 「横浜市港北区権原大原北遺跡」吾妻考古学研究所
- 山内清男 1940 「堀之内式」「日本先史時代土器図譜」第VI輯
- 吉田浩明ほか 1998 「寸嵐二号遺跡発掘調査報告書」相模湖町No.6 遺跡発掘調査団

No	遺跡名	地域図	所在地	集落の時期	遺跡種別	発見遺構				文献名
						病院形敷石(住居跡)	据立性遺物址	墓土塙墓・既存墓	貯藏穴	
						-	-	-	-	
1	三ツ沢貝塚	①	神奈川区沢渡55番80	堀之内1・2式	貝塚	-	-	-	○	2010 今泉
2	箱荷山貝塚	②	南区山手561ほか	堀之内1・2式	貝塚	5	-	(1) (3)	2002 松田	
3	帽子峯遺跡	①	保土ヶ谷区峰町358-1番地ほか	堀之内1・2式	集落	12	--	2 16	1984 近藤	
4	旗原大原遺跡	①	港北区藤原町72-2	堀之内1・2式	集落	7	-	4 23	2004 天野	
5	旗原大原北遺跡	①	港北区藤原町73-2ほか	堀之内1・2式～ 加曾利B式	集落	23	-	3 3	2007 山田	
6	小池遺跡	①	地区上白根町字小池1161-7ほか	堀之内1式	集落	1	-	-	-	1984 國平
7	住渡遺跡	①	緑区長沼田町字住渡	堀之内1式	集落	2	-	1	-	1996 伊丹
8	緑ヶ原遺跡A地点	①	緑区さつきが丘803番地外	堀之内1・2式	集落	6	-	1 22	1992 平子	
9	矢崎山西遺跡	①	都筑区芦田町4247番地他	堀之内1式	集落	10	-	-	-	2004 武部
10	内ノ谷貝塚	①	都筑区南山町二丁目17付近	堀之内1式	集落	6 1	8	13	2003 板本	
11	華藏台南遺跡	①	都筑区南山一丁目20	堀之内1式	集落	12 3	7	4	1993 石井	
12	牛ヶ谷遺跡	①	都筑区牛田南二丁目5	堀之内1式	集落	3 3	5	2	1993 石井	
13	山田大塚遺跡	①	港北区東山田町2015番地ほか	堀之内1・2式	集落	26	8	1	19	1990 石井
14	川和向原遺跡	①	都筑区川和町1069付近	堀之内1式	集落	20	19	13	1995 石井	
15	原出口遺跡	①	都筑区川和町1019付近	堀之内1・2式	集落	22	4	28	10	1995 石井
16	北川貝塚南遺跡	①	都筑区早瀬三丁目	堀之内1式	包含層	-	-	-	1	1997 鈴木
17	小丸遺跡	①	都筑区大丸11	堀之内1・2式～ 加曾利B式	集落	22	42	110	50	1999 石井
18	新作小高台遺跡	①	高津区新作一丁目9	堀之内1式	集落	1	-	-	-	1983 増子
19	岡上丸山遺跡	①	麻生区岡上675-1	堀之内1式	集落	6	-	1	2	1990 竹石
20	東神生小学校内遺跡	①	麻生区玉桜寺入り口121-1番地ほか	堀之内1式	集落	2	-	-	-	1995 竹石
21	岡上-4遺跡第2地点	①	麻生区岡上字栗畠793ほか	堀之内1式	集落	-	-	-	2	2001 风地
22	岡上-4遺跡	①	麻生区岡上字栗畠793ほか	堀之内1式	集落	-	-	-	3	1998 风地
23	榎戸A・B貝塚	②	横浜市清瀬町2-82ほか	堀之内1・2式	集落	-	-	-	-	2010 野内
24	原口遺跡	⑤	平塚市上吉沢1617番地ほか	堀之内1・2式	集落	5	-	-	4	2002 長岡
25	上吉沢市場遺跡群A地区	⑤	平塚市上吉沢市場15301ほか	堀之内1・2式	集落	2	-	-	3	2000 高杉
26	真庭北金目遺跡群1SE区	⑤	平塚市北金目字入谷戸1552-1外	堀之内1・2式	水塘遺構	-	-	-	-	2011 川瀬
27	王子ノ台遺跡	⑤	平塚市王子ノ台	加曾利B式～ 加曾利B式	集落	22	?	○	○	1991 常木 1995 秋田
28	間谷ノ島神西遺跡	③	鎌倉市間谷字島ノ神1524番1他	堀之内1式	集落	3	-	-	1	1985 永井
29	東正院遺跡	③	鎌倉市間谷字東正院	堀之内1式	集落	4	-	-	1	1972 鈴木
30	遠藤貝塚(西部217地点)	③	茅ヶ崎市堤字丸山5615-6番地・藤沢市 遠藤	堀之内1式	集落	4	-	4	-	1992 寺田
31	遠藤広谷遺跡	③	藤沢市遠藤3520番地ほか	堀之内1式	集落	-	-	2	-	2003 戸田
32	僧行遺跡	③	藤沢市僧行	堀之内1式	集落	4	-	-	2	1994 戸田 2012 離井
33	久野北側上遺跡第I地点	⑥	小田原市久野1177番地	堀之内1・2式	包含層	-	-	-	-	2003 小林
33	久野北側上遺跡第II地点	⑥	小田原市久野1178番9	堀之内1・2式	集落	-	1?	-	5	2013 離井
33	久野北側下遺跡第II地点	⑥	小田原市久野字北側下903外	堀之内1式	集落	1	-	1	-	2004 小池
33	久野北側下遺跡第III地点	⑥	小田原市久野字北側下906番地外	堀之内1式	集落	-	-	-	3	1996 小林
33	久野北側下遺跡第IV地点	⑥	小田原市久野字北側下890-3,889-1	堀之内1式	集落	1	-	1	-	2004 小池
33	久野北側下遺跡第V地点	⑥	小田原市久野字北側下889-4外7堆	堀之内1式	集落	1	-	-	-	2004 小池
33	久野北側下遺跡第VI地点	⑥	小田原市久野字北側下865-6外6堆	堀之内1式～ 坂削初頭	集落	12	-	-	-	2004 小池
34	久野一本松遺跡	⑥	小田原市久野	堀之内1・2式	集落	6	-	-	-	2002 戸田
35	御経長屋遺跡第3地点	⑥	小田原市南町地内	堀之内1式	集落	1	-	1	-	2001 小林
35	御経長屋遺跡第4地点	⑥	小田原市南町地内	堀之内1式	集落	1	-	-	-	2001 小林
36	曾我谷津津本遺跡第I地点	⑥	小田原市曾我谷津592番ほか	堀之内1式	集落	6	-	-	-	2010 小池
37	岸沢・久保山遺跡	③	茅ヶ崎市岸沢2236	堀之内1式～ 加曾利B式	集落	-	-	-	1	1997 茅ヶ崎市文化振興財团

第1表 神奈川県堀之内1式期主要遺跡地名表(1)

No	遺跡名	地図	所在地	集落の時期	遺跡種別	発見遺構				文献名
						横溝形(敷地・住居址)	掘立柱(建物址)	裏(土坑墓・配石墓)	貯藏穴	
38	芹沢・行谷貝塚	③	茅ヶ崎市行谷	堀之内1式～加曾利B式	集落	○	-	○	○	1987 茅ヶ崎市
39	堤貝塚	③	茅ヶ崎市選字十二天1461他	堀之内1・2式	集落	3	-	-	-	2000 堤貝塚グループ
40	下溝堀川遺跡	④	相模原市南区下溝字溝戸737番地1外	堀之内1・2式	集落	8	-	7	6	1994 遠
41	はじめ沢下遺跡	④	相模原市緑区中沢地先	堀之内1・2式	集落	8	-	10	-	2009 井辺
42	当麻亀形遺跡	④	相模原市南区当麻字亀形526-1他	加曾利B1式	集落	4	-	-	3	2002 伊東ほか
43	田名塙田・西山遺跡	④	相模原市中央区田名字塙田及び西山地内40街区	堀之内1・2式	集落	7	-	-	-	2002 土井ほか
44	寸尾二号遺跡	④	相模原市緑区寸尾871-1外	堀之内1式	集落	1	3	2	16	1998 吉田ほか
45	青根馬渡No.2遺跡	④	相模原市緑区青根字馬渡1676-1他	堀之内1式	集落	4	-	1	-	1999 平野ほか
46	蛭久保西遺跡	④	相模原市緑区山四丁目地先	堀之内1・2・加曾利B1式	集落(祭祀場)	-	-	52	9	2014 井辺ほか
47	大島下台遺跡	④	相模原市緑区大島字下台	堀之内1式	集落	1	-	-	-	2004 大賀、2012 小宮山ほか
48	今泉峰遺跡	⑤	秦野市今泉877番地	堀之内1式	集落	2	-	-	-	1998 増田
49	寺山遺跡	⑤	秦野市寺山485番地外	堀之内1・2式	集落	○	-	○	-	1996 後藤、1985 日野ほか
50	東谷戸遺跡	④	厚木市上荻野430番地他	堀之内1式	集落	3	-	-	-	1994 戸田
51	相ノ原遺跡V地点4次調査	③	大和市つきみ野3-28-2		包含層(集落)	-	-	-	-	1997 村澤ほか
52	池端・鳴山遺跡	⑤	伊勢原市池端242他	堀之内1式	集落	3	-	-	-	2004 小川ほか
53	三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)	⑤	伊勢原市三ノ宮字下谷戸1100他		集落	5	-	4	5	2000 松田ほか
54	下北原遺跡	⑤	伊勢原市日向字下北原	中期～堀之内1・2式・加曾利B1式	集落	10	-	14	-	1977 鈴木ほか
55	上土櫛廻遺跡	③	綾瀬市上土櫛南一丁目1355-1外	堀之内1・2式～加曾利B2式	集落	6	14	5	1	1993 阿部ほか、1998 矢島・阿部ほか、2008 矢島ほか
56	宮久保遺跡	③	綾瀬市早川字新堀瀬2031番地他	堀之内1・2式～加曾利B2式	包含層(作業場)	-	-	-	-	1987 鶴堂島ほか
57	大磯小学校遺跡	⑤	中部大磯町東小磯3番地	堀之内1～加曾利B式	集落	-	-	2	-	1976 鈴木ほか
58	久保ノ坂遺跡	④	愛甲郡清川村	堀之内1式	集落	1	-	-	-	1998 恵田ほか
59	馬場遺跡	④	愛甲郡清川村	堀之内1式	包含層	-	-	-	-	1999 鈴木ほか
58	馬場(No.3)遺跡	④	愛甲郡清川村	堀之内1式	集落	2	-	-	-	1996 富永
58	表の屋敷(No.8)遺跡	④	愛甲郡清川村	堀之内1式～加曾利B式	集落	3			3	1997 恵田ほか
58	北原(No.9)遺跡	④	愛甲郡清川村	堀之内1・2式	集落	8	-	-	-	1994 市川ほか
58	北原(No.11)遺跡	④	愛甲郡清川村	堀之内1・2式	集落	1	-	-	-	1994 市川ほか
58	ナラサス遺跡	④	愛甲郡清川村	堀之内1式	集落	2	-	4	-	1991 上田ほか
59	青ヶ台貝塚	②	金沢区並利谷	堀之内1式	貝塚	-	-	-	-	1994 佐野ほか

第2表 神奈川県堀之内1式期主要遺跡地名表(2)

てんじんやまじょう 【資料紹介】 鎌倉市天神山城出土の古代土器

押木 弘己

はじめに

1. 天神山城とその周辺
2. 調査成果の概要

3. 出土遺物の様相

- おわりに—若干の検討—

はじめに

ここで紹介する資料は、鎌倉市山崎に所在する天神山城（鎌倉市No384遺跡）で発見された8～10世紀の土器である。資料は1995～1996年の発掘調査で出土した遺物の一部に過ぎないが、周辺の調査成果と併せて当地域の古代史像を考える上で重要な成果であることから、本誌上を借りて紹介させていただくこととした。

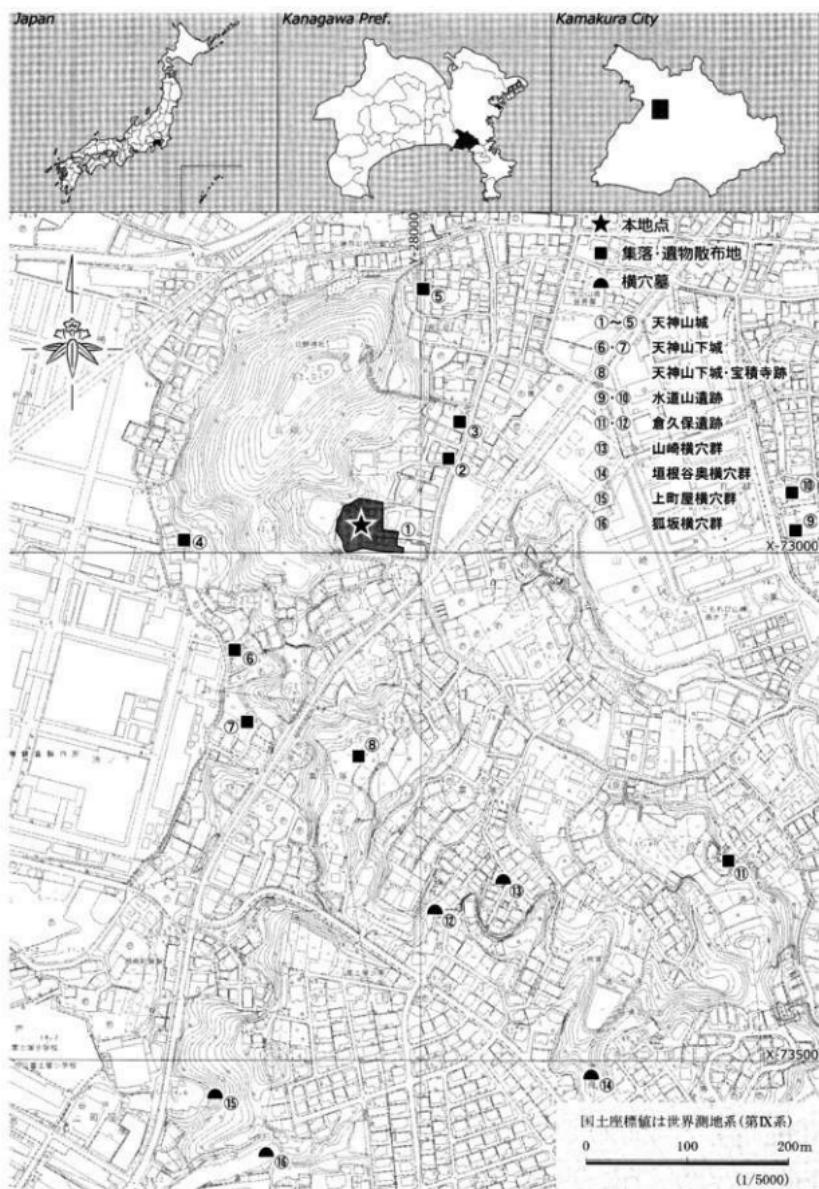
当地点での発掘調査は集合住宅の建設に伴って実施されたもので、2180m²に及んだ調査実施面積のうち、国庫補助事業分の120m²について報告がなされている（松山他1997）。この他、平安時代のロクロ土師器を主題とした論考で10点の資料を取り上げられ（松山2000）、本稿でも全点を再実測した上で掲載している。このように、既報告の内容は極めて部分的かつ断片的なものに留まっており遺跡全体の様相は不詳であるが、調査組織は既に解散してしまっているため、かかる情報が公表される見通しは立っていない。現在は筆者の勤務先である鎌倉市教育委員会が資料を保管しているが、2年ほど前、この引き取り後の内容把握に際して資料実見の機会を得たことが本稿を起こす契機となっている。「埋蔵文化財の記録保存」という前提に立てば本来は部分報告という方法を取るべきではないが、将来的な全体報告に資する希望も込め、提示を試みたい。

1. 天神山城とその周辺

（1）天神山城の調査成果

天神山城は鎌倉市北西部の山崎地区に所在し、JR大船駅から南西2kmほどに位置する。北に突き出た丘陵突端部である「天神山」を中心に、東西350m×南北400mの範囲が鎌倉市No384遺跡として神奈川県の遺跡台帳に登録されている。「天神山」は標高63m強を頂点とし、現況は南側鞍部が道路で寸断されているため独立丘陵の体を成している。山頂付近には旧山崎村の村社であった北野神社が鎮座しており、社殿の傍らに応永十二年（1405）銘をもつ宝篋印塔が建っている。遺跡名は中世の山城という見方に基づくのだろうが、城郭としての痕跡は不明確である。なお、山頂付近の90m×170mの範囲だけは天神山遺跡（鎌倉市No55）として、別遺跡となっている。

天神山城ではこれまでに5地点で発掘調査が実施され、今回紹介する資料は第1図の地点①で出土した。調査成果の概要是次節で述べる。当地点以外は個人住宅の建設に伴う小規模調査に限られるが、何れの地点でも古墳時代後期～平安時代の土器が出土しており、地点⑤では古墳後期～奈良時代の竪穴住居4軒が重複した状態で確認されている。また、少数だが中世の遺物も散見され、旧市街域以外では希少な例といえる。



第1図 天神山城の位置と周辺の遺跡

この他、天神山の北東裾付近では、昭和42年頃に採集された古墳時代後期の土器群が知られ、炭化物層の広がりや滑石製臼玉に伴って出土したという。具体的な出土地点は不明だが、山裾から60~70mほど離れた市道際であったというから（菊川1995）、地点⑤の東側辺りであったと推察される。

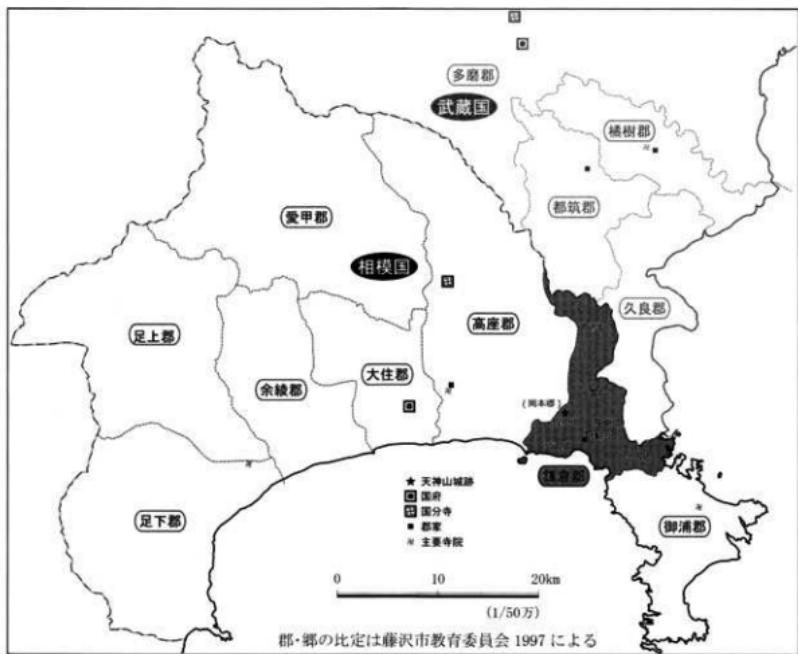
（2）周辺遺跡の様相

第1図を参照しながら、近隣の遺跡にも目を向けてみたい。天神山下城（No.358遺跡）での調査は3例に限られるが、2014~2015年度に実施された地点⑥では宝積寺跡（No.240遺跡）に跨って丘陵上から斜面地にかけて比較的広い面積が調査されている。現時点では成果について公表はされていないので、今後の報告を待つことにしたい。水道山遺跡（No.20遺跡）の地点⑦では、弥生時代~古墳時代の竪穴住居が36軒も発見されている（水道山戸ヶ崎遺跡）。未だ断片的な情報が開示されているのみで成果の全貌は明らかでないが、弥生時代の住居は後期初頭~中葉が主体といい、この中から板状鉄製品や6個体に上る環状青銅製品が出土して話題となった。古墳時代では中期と後期の住居も確認されている（齊木1981他）。地点⑧では狭い調査範囲のなか遺構は確認されていないが、縄文時代中期前葉~後期中葉と弥生時代中期後葉~古墳時代後期の遺物が出土しており、弥生後期後半と古墳中期後半~後期に出土量が増すという（若松2002）。古墳中期の資料としては市内でも最も充実した資料群であり、今後は同時期における集落様相の把握と、前後する時期も含めた遺跡消長の解明が期待される。水道山遺跡では、上記の2地点から南東に500mほど離れた場所でも400mが調査され、平安時代後期の住居が12軒発見されている（土屋1997）。倉久保遺跡（No.226遺跡）の地点⑨では、丘陵の斜面地で古墳前期と奈良時代の竪穴住居5軒が発見され、うち4軒は前者に帰属すると考えられる（継1996）。

山崎地区は、鎌倉市域でも古墳時代後期の横穴墓が密集する地域である。倉久保遺跡では地点⑩で有縁の高棺座をもつ1基が調査され、出土した湖西産須恵器のフラスコ形瓶から7世紀前半頃の造営と考えられている。報告者は、当地の地番から昭和32年に6基が調査された「山崎横穴群B区」（赤星1959）に該当する可能性を示している（田村1999）。北東70mの地点⑪は、2群36基が存在した山崎横穴群A区と見られるが、遺跡名はB区（No.21遺跡）となっていて混乱が生じている。現在は宅地化しており、墓群としての面影は全く窺えない。『鎌倉市史』は地点⑫の垣根谷奥横穴群（No.45遺跡）に10基以上、地点⑬の上町屋横穴群（No.35遺跡）に3基以上が遺存する他、尚多くの横穴墓群が当地区周辺に存在していたことを伝えている（赤星前掲）。この他、「神奈川県史」（赤星1979）での記述も踏まえて整理が試みられているが（田村2002）、昭和50年以前の調査については資料の混乱が多々見受けられ、完全に解消されるには至っていない。地点⑭は孤坂横穴群（No.37遺跡）で、「寺分藤塚遺跡」の中で3群10基について調査の成果が報告されている。このうちA群は8基で構成され、概ね7世紀第4四半期以前~8世紀の第2四半期に造営・追葬が行われたと考えられている。B・C群は各1基で構成され、C群→B群→A群の順に造営が進んだと理解されている（土屋2002）。他にも宅地化の進行により調査がされないまま消滅してしまった墓群は多数あり、調査された横穴墓についても混乱の痕を多く残しているが、前述のように複数の地点で同時代の住居が発見されている状況を考えれば、該期にあって集落と墓域との関連性を見出しえる、希少な研究フィールドといえるだろう。

（3）古代の天神山周辺

第2図には、神奈川県における律令制下の行政区分を示し、その中に天神山城の他、官衙・寺院など代表的な遺跡の位置をプロットした。古代の相模国鎌倉郡は現在の鎌倉市と逗子市の全域に加え、横浜市の南西部と藤沢市的一部分も含んでいたとされる。郡域の広大に諸説あるが、本稿では『神奈川の古代道』の付図か



第2図 古代行政区区分上の天神山城

ら柏尾川を高座郡との境界とする考えを採用した。鎌倉郡域には「和名類聚抄」郡郷部の記載から沼濱・鎌倉・埼立・荏原・尺度・大島の7郷が所在していたことが分かり、遺存地名の考証から、9世紀代には大よそ第2図のような郷の配置状況であったと理解されている。遅って天平五年（733）銘をもつ綾瀬市宮久保遺跡出土木簡に「鎌倉郷鎌倉里」が、正倉院文書の「相模國天平七年封戸租交易帳」に尺度・荏原・鎌倉の各郷名が見える他、天平勝宝元年（749）銘をもつ正倉院御物の古裂（調繡布）に「相模國鎌倉郡方瀬郷」と、ほぼ同時期とされる二裂には「沼浜郷」・「□浜郷」と記されており、8世紀半ばの鎌倉郡には方瀬郷が存在し、且つ沼濱郷もこの頃には成立していたことが明らかとなっている。鎌倉郡家（郡衙）はJR鎌倉駅から西に300mの今小路西遺跡（御成小学校地点）で発見されていることから、現在の鎌倉中心市街地が古代鎌倉郡の中心域と鎌倉郷であったと考えられている。この他、沼濱・荏原・梶原郷については遺存地名や神社名から、大よその郷域推定が可能となっている。尺度郷と大島郷については確実な遺跡地がない。方瀬郷は藤沢市域に「片瀬」が残り、中世には「吾妻鏡」に「固瀬宿」などと現れるので確定できるだろうが、「和名類聚抄」に見えない点については単純な記載漏れとする理解や、名称の改変も含めた郷の再編説がある。

天神山城が所在する山崎地区は、古代には梶原郷であったと理解するのが順当であろう。現在、山崎から丘陵を挟んで2km南に梶原の地名が残るので、仮に他郷に属していたとしても梶原郷とは至近の位置関係に在ったことがいえるだろう。第1図-地点④・⑥・⑦の西には柏尾川の旧流路が形成した氾濫原が広がるが、現在、柏尾川の北西側対岸には岡本の地名が残ることから、この一帯を高座郡岡本郷に当てる見方がある。

2. 調査成果の概要

次に本題となる地点①の様相について、既報告の記述をもとに確認しておきたい。本稿では奈良・平安時代以外の説明は省略するが、中世では鎌倉時代前期の13世紀前半を中心に池状遺構や柱穴列が展開し、一定量の手づくねかわらけが出土するなど、鎌倉旧市街城の外部としては特異な遺跡であることだけ述べておく。本地点は、「天神山」の東裾部に形成された幅80m、奥行き120mほどの小谷戸に立地している。調査前、谷戸内の標高は13~17.5mを割り、東側の沖積地（谷底平野）に向けて低くなっている。

第3図には国庫補助事業分の報告書（松山他1997）から古代遺構の全体図を引き、改変のうえ掲載した。薄い水玉トーンを掛けたA区・B区の計120m²についてのみ詳細な報告がなされている。本稿で紹介するのは未報告分の4基の遺構（SI01・SE01・SK203・SK230、第3図の網掛け部分）から出土した資料で、注記から出土遺構は特定できるものの、出土状況に関する情報は断片的であり明らかとなっていない。以下、検出された古代遺構について概略を述べるが、帰属時期に関する表記は報告書の記載内容に準拠する。

平安時代後期（11世紀代）では、溝状遺構4条と遺物集中2ヶ所が検出されている。調査区北東部で検出された16~18号溝や1号土器溜まりが該当し、ロクロ土師器や灰釉陶器の供膳具が出土している。



第3図 天神山城 古代遺構全体図

平安時代中期（9世紀末～10世紀前半）の遺構として、竪穴住居6軒、建物1棟、井戸1基、土坑・ピット40基、遺物集中2ヶ所が検出されている。どの遺構が該期に帰属するのか不明な部分が多いが、次節で取り上げる土坑2基（SK203・SK230）と井戸1基（SE01）は遺物様相から当段階に属すものと考えている。建物は調査区の中央、第3図の丸囲み部分で検出された1間×1間の掘立柱建物に当たると考えられ、報告書では「3号建物址」と呼称されている。同建物については、後節において若干の検討を試みたい。SE01は報告書で「2号井戸址」と呼称されているが、これは整理作業時に中世遺構を「1号井戸址」として認定したために「2号」へと繰り下げられた結果かと推測している。一辺が90cmの方形縦板組みの井戸枠をもち、掘り方は漏斗状を呈していたという（松山1996）。

奈良時代前半の遺構として竪穴住居4軒と遺物集中1ヶ所が確認され、これに先行する古墳時代後期では竪穴住居2軒が確認され、調査区西寄りの「2号・9号住居址」がこれに当たるという（松山1996）。調査区南西部で検出されたSI01は後述するように8世紀前葉頃の所産であり、既報告で触れている「1号住居址」と同じ遺構と考えて間違いないだろう。

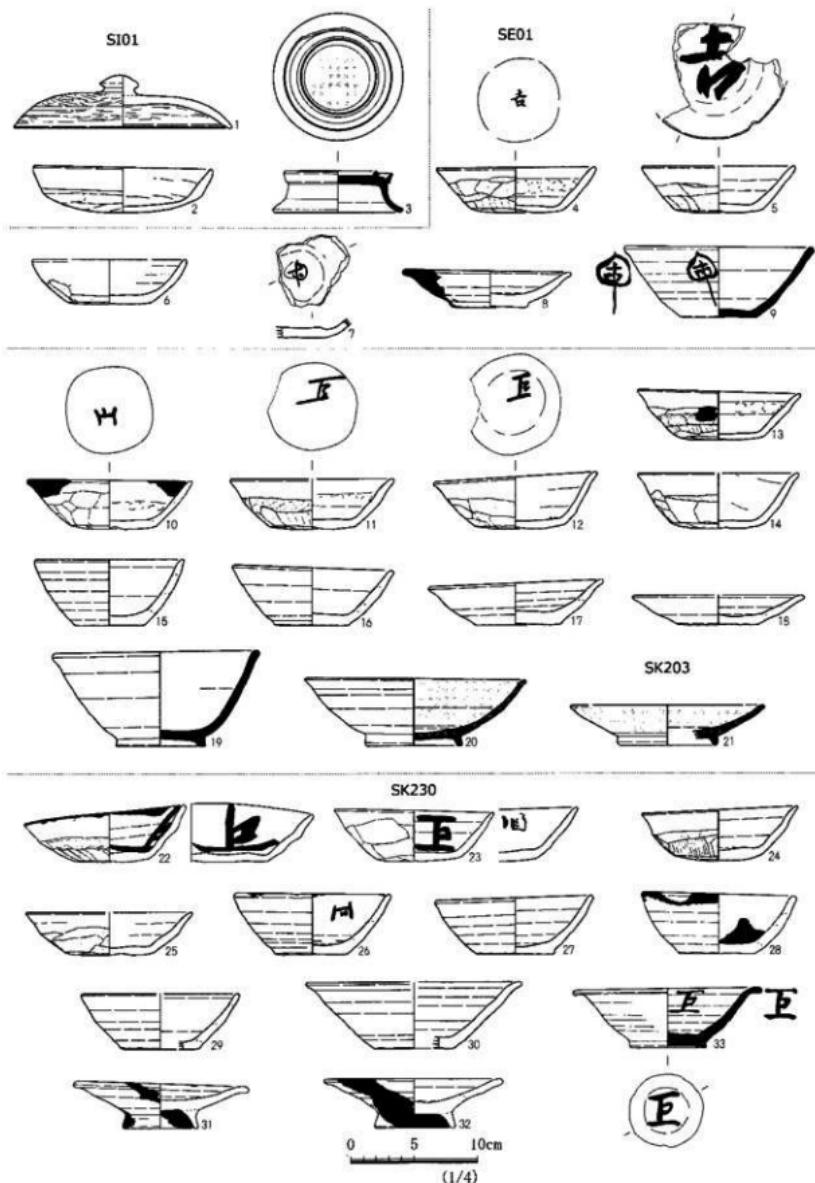
3. 出土遺物の様相

第4図には各遺構から出土した遺物を掲げ、第1表にその観察内容を示した。今回は注記から帰属遺構が明確な資料のみ抽出したが、他にも尚多数の古代遺物が保管されている。

SI01：1の土師器蓋は白色針状物質を含む精良な胎土で、成形・調整とも丁寧である。無彩の盤状坏に伴うと見られるが、この種の製品は鎌倉郡域での在地産と推測され、官衙周辺だけでなく集落遺跡からの出土例も多い。2の土師器坏は相模型坏が成立する直前段階に位置付けられ、8世紀前葉（第2四半期の前半頃）の年代観を与える。3の須恵器円面碗は透かし窓のない圓足をもつ。硯面（海）の外縁が一部欠損するが、ほぼ完形である。硯面（陸）は摩耗して滑らかであり、墨痕が残る。小品だが作りは非常に精巧で、硬質な焼き上がりで灰黒色を呈している。高台内面に自然釉が付着しており、天地を逆にして窯詰めされたことが分かる。色調から武藏国域など関東西部の窯産品と考えているが、今のところ産地の特定には至っていない。8世紀前葉であれば湖西窯をはじめとする東海産須恵器の搬入も一定量あることから、引き続き視野を広げながら生産窯を追求していきたい。

SE01：4～7は土師器の相模型坏。4・5の底部内面に「吉」、7の底部内面には判読不明の墨書が見られる。8のロクロ土師器皿は、外面口縁部～体部に黒色の付着物が見られるが、油煤であるのか判然としない。9の須恵器碗は体部外面に判読不明の墨書があり、7の内底面墨書と共に通の形状を呈することから何らかの意味を有した記号かと考えられる。第5図で示したように相模型坏は口径／底径比が0.5よりも大きいことから（第5図）、大よそ9世紀後半の所産と考えられる。須恵器碗はG5窯式古段階とされるので（松山1996）、10世紀代まで下る要素も含んでいよう。SE01では他に掘り方覆土から黒色系漆を塗った方6.7cmの小箱が出土しており、平安時代の漆器として希少な例となっている（伊丹2012）。

SK203：土師器の相模型坏のうち、10～12の底部内面には墨書文字があり、それぞれ細部は異なるが「巨」の形状を取っている。上下の横画が長過ぎる印象があり、形のとおりに読めるのか、疑問も残る。15～18はロクロ土師器の坏と皿で、既に松山敬一郎氏が論考で紹介している（松山2000）。坏の口径／底径比は0.5をわずかに下回る。20の灰釉陶器碗は調整技法からO53窯式の範疇に収まると思われる。土師器の相模型坏は



第4図 天神山城出土の古代遺物

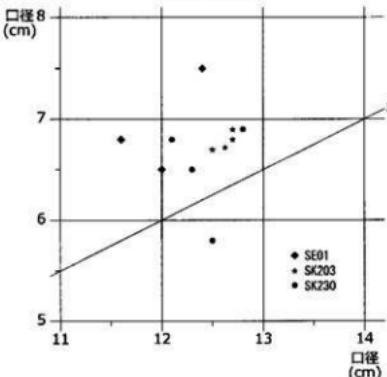
第1表 出土遺物観察表

番号	種別	基準	法量(cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
S101 出土遺物						
1	土師器	坪	17.0	—	4.2	残存: 4/5 [274]g 焼成: 良 砂土: 緩密、白色針状物質・角閃石少量 色調: 淡褐色 調整: 内外面粗いヨコヘラミガキ
2	土師器	坪	14.0	—	3.7	残存: 完形 157g 焼成: やや不良 砂土: 緩密 色調: 淡褐色 調整: 体部外面のラクゼリ磨拭
3	須恵器	円盤鏡	8.3	9.9	3.3	残存: 路完形 [145]g 焼成: 良、硬質 砂土: 黒色・白色粗砂を微量含み緻密 色調: 灰黒色 備考: 鏡面の直径5.3cm、摩耗し墨痕あり 高台内に自然輪 縫合: 底地未詳
SE01 出土遺物						
4	土師器	相模型坪	12.4	7.5	3.6	残存: 完形 118g 焼成: 良 砂土: 緩密、雲母・小礫少量 色調: ぶい褐色 備考: 内底面に墨書「吉」ロゴ部分に焼付着
5	土師器	相模型坪	(11.6)	(6.8)	3.7	残存: 口1/4～底1/3 [60]g 焼成: 良、硬質 砂土: 緩密、小礫、雲母微量 色調: 淡褐色 備考: 内底面に墨書「吉」
6	土師器	相模型坪	(12.0)	6.5	3.6	残存: 口1/4～底1/4 [74]g 焼成: 良 砂土: 緩密、スコリア・雲母微量 色調: 淡褐色 備考: 内底面黒窓
7	土師器	相模型坪	—	—	[1.5]	残存: 底小片 [24]g 焼成: 良、硬質 砂土: 緩密 色調: 暗褐色 備考: 内底面に墨書 (判読不明)
8	ロクロ 土師器	皿	12.9	6.1	3.0	残存: 3/4 [187]g 焼成: 良、硬質、下部は還元炎焼成氣味 砂土: 微砂質、白色針状物質・右英粒少量 色調: 橙色～淡褐色 調整: 外底面回転系切り痕
9	須恵器	鏡	14.6	5.9	5.7	残存: 4/5 [181]g 焼成: 良 砂土: 砂質、やや粗い 小礫微量 色調: 灰白色～淡褐色 調整: 外底面回転系切り後無調整 備考: 体部外面に墨書 (判読不明) 南多摩産?
SK203 出土遺物						
10	土師器	相模型坪	12.7	6.8	4.0	残存: 4/5 [128]g (石質含む) 焼成: 良、硬質 砂土: 緩密、雲母少量 色調: 暗褐色 備考: 口縁部内外面に焼付着 内底面に墨書「巨」カ
11	土師器	相模型坪	(12.6)	6.7	4.1	残存: 口1/4～底残存 [111]g 焼成: 良 砂土: 緩密、小礫、雲母微量 色調: 淡褐色 備考: 内底面に墨書「巨」
12	土師器	相模型坪	12.7	6.9	4.5	残存: 3/4 [108]g 焼成: 良、硬質 砂土: 緩密、小礫・雲母少量 色調: 淡褐色 備考: 内底面に墨書「巨」
13	土師器	相模型坪	12.5	6.7	4.0	残存: 完形 126g 焼成: 良 砂土: 細砂質、小礫・雲母微量 色調: 淡褐色 備考: 体部外面上に焼付着
14	土師器	相模型坪	(12.4)	7.5	4.5	残存: 口1/4前～底3/4 [86]g 焼成: 良、硬質 砂土: 緩密、小礫・スコリア・石英少量 色調: 暗褐色 備考: 内底面に墨書? (不鮮明)
15	ロクロ 土師器	坪	11.6	5.5	5.2	残存: 3/4 [147]g 焼成: 良、一部還元炎燒成 砂土: 微砂質、相模型の砂土に近似 白色針状物質・石英粒微量 色調: 淡褐色～灰黑色 調整: 外底面回転系切り後ナデ? 備考: 松山2000-第14図1
16	ロクロ 土師器	坪	12.4	5.9	4.8	残存: 3/4 [160]g 焼成: 良、一部還元炎燒成 砂土: 微砂質、白色針状物質・石英・角閃石少量 色調: 橙色～淡褐色 調整: 外底面右回転系切り後形状変形 備考: 松山2000-第14図2
17	ロクロ 土師器	皿	13.5	6.6	3.6	残存: 3/4 [170]g 焼成: 良、一部還元炎燒成 砂土: 微砂質、白色針状物質・石英・雲母少量 色調: 淡褐色 調整: 外底面回転系切り後無調整 備考: 松山2000-第14図3
18	ロクロ 土師器	皿	(12.9)	6.0	3.0	残存: 1/2個 [76]g 焼成: 良 砂土: 細砂質、白色針状物質・雲母粒少量 色調: 淡褐色 調整: 外底面右回転系切り後棒状圧痕 備考: 松山2000-第14図4
19	須恵器	高台付鏡	15.9	7.1	7.6	残存: 3/4 [233]g 焼成: 一部焼けムラあり 砂土: 砂質でやや粗い 砂礫・右英少量 色調: 灰白色 調整: 外底面右回転系切り後棒状圧痕 備考: 南多摩窯産
20	灰釉陶器	鏡	17.0	7.5	5.4	残存: 口一部欠損 [265]g 良 砂土: やや砂質、黒色粒少量 色調: 灰色 色調: 淡緑灰色 調整: 内外面刷毛塗りの灰釉 外底面回転系切り後無調整 備考: 採土系・三河～遠江窯か
21	灰釉陶器	皿	(15.0)	(6.6)	3.3	残存: 口1/8～底1/4 [50]g 焼成: 良、硬質 砂土: やや粗、黒色粒子表示 色調: 淡灰色 色調: 淡緑灰色 備考: 採土系・三河～遠江窯か

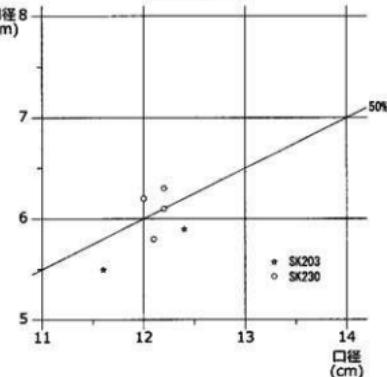
番号	種別	器種	法量(cm)			その他の特徴
			口径	底径	高さ	
SK230 出土遺物						
22	土師器	相模型坏	12.5	5.8	4.5	残存: 4/5 [121]g 焼成: 良 胎土: 細砂粒・雲母微粒・灰色スコリア少量 色調: にぶい橙褐色 備考: 体部内面に墨書「巨」・口縁部内外面に煤付着
23	土師器	相模型坏	12.3	6.5	4.2	残存: 2/3 [109]g 焼成: 良 胎土: 細密、褐色スコリア少量 色調: にぶい橙褐色 備考: 体部内面に墨書「巨」・「酒」カ
24	土師器	相模型坏	12.1	6.8	4.3	残存: 3/4 [122]g 焼成: 良 胎土: 緩密、灰色スコリア少量 色調: にぶい橙褐色
25	土師器	相模型坏	(12.8)	6.9	3.4	残存: 口1/3～底2/3 [93]g 焼成: 良 胎土: 細砂粒多量・雲母微粒や多量 色調: 淡褐色
26	ロクロ 土師器	坏	12.1	5.8	4.9	残存: 略形 [201]g 焼成: 良 (還元炎焼成) 胎土: 細砂質で緻密。白色針状物質や多量 色調: 淡褐色～暗灰色 調整: 外底面回転糸切り後無調整 備考: 体部内面に横位の墨書「巨」 口縁部内外面に煤付着 松山2000-第14図5
27	ロクロ 土師器	坏	12.2	6.1	4.7	残存: ロ一部欠損 [155]g 良、一部還元炎焼成 胎土: 細砂質、白色針状物質・石英微粒少量 色調: 淡褐色～暗灰色 調整: 外底面右回転糸切り後無調整 備考: 松山2000-第14図7
28	ロクロ 土師器	坏	12.0	6.2	4.9	残存: 1/2強 [141]g 焼成: 良 胎土: 細砂質、石英・角閃石微粒 色調: 淡褐色、調整: 外底面右回転糸切り後無調整 備考: 口縁部外側に煤付着、内側底部下位～底部付近墨書き 松山2000-第14図6
29	ロクロ 土師器	坏	(12.2)	(6.3)	4.4	残存: 1/3 [68]g 焼成: 良 胎土: 細砂質、白色針状物質・石英少量 色調: 淡褐色、調整: 外底面回転糸切り後無調整 備考: 松山2000-第14図8
30	ロクロ 土師器	碗	(16.6)	(6.2)	5.3	残存: 1/2弱 [96]g 焼成: 良、破損一部還元炎焼成 胎土: 緩密、白色針状物質や多量 色調: 淡褐色～灰色 調整: 外底面回転糸切り後無調整
31	ロクロ 土師器	高台付皿	13.1	5.8	3.3	残存: 略形 [165]g 焼成: 良 胎土: 細砂質で緻密 白色針状物質・角閃石微量 色調: 暗灰色、調整: 外底面回転糸切り後無調整 備考: 口縁部・高台内外面に煤付着 松山2000-第14図10
32	ロクロ 土師器	高台付皿	13.8	6.1	3.9	残存: 2/3 [154]g 焼成: 良 胎土: 細砂質、白色針状物質・雲母微粒少量 色調: 淡褐色 備考: 外底面回転糸切り後無調整 松山2000-第14図9
33	須恵器	高台付碗	14.4	5.8	4.8	残存: ロ一部欠損 [186]g 焼成: やや焼けムラあり 胎土: やや粗い、白色粗砂や多量 色調: 暗灰色～褐色 備考: 体部内面と外表面に墨書き「巨」・南摩県産

法量の()は復元値を、[]は残存値を示す

土師器 相模型坏



ロクロ土師器 坏



第5図 土師器坏類の法量分布

法量分布から9世紀後半に収まる要素が強く、10世紀前半までを含めた年代観が与えられそうである。この他にも、灰釉陶器や須恵器の壺が土坑内で一括出土している写真も紹介されている（松山1996）。

SK230：土師器相模型壺の4点のうち、22の体部内面には「巨」が、23の体部内面には「巨」と「酒」？の墨書きが各々正位で記されている。26～29と31・32のロクロ土師器壺・皿は松山氏が前掲論考で紹介している。両者とも法量・器形の齊一性が高く、壺の口径／底径比は0.5前後でまとまる（第5図）。26の体部内面には「巨」の墨書きが横位で記されている。33の須恵器高台付碗は口縁部が大きく外に開く器形で、低くて幅広の高台が付く。体部内面と高台内に「巨」の墨書きが記されている。9の碗と19の高台付碗も含めて南多摩窯産と見られる。松山氏は、いずれもG5窯式の古段階に位置付けている（松山1996）。須恵器でも、より一般的な供膳具である壺を含んでいない点は、器種構成上の選択結果と理解できるだろうか。土師器の相模型壺は法量の上ではSK203の資料と大差ないが、成形技法上、体部の引き延ばし方が僅かに強くなり、24のように丸底に近い資料が見受けられるなど若干の粗雑化傾向も窺える。このことから、ほぼ接した時間幅の中でSK203→SK230の順に土器の廃棄行為が行われたと推測している。SE01は、大よそSK203と同時期と考えて良いだろう。

おわりに—若干の検討—

ここまで、遺跡の概要と出土遺物の様相について述べてきた。これまでロクロ土師器に限って一部資料が紹介されていたが（松山2000）、今回はこれらを再録するとともに、共伴する土師器や須恵器・灰釉陶器も扱ったことで年代的位置付けを行うための比較材料を提示できたのではないかと思う。最後に、出土遺物の特徴を整理した上で、古代における当地点の性格について若干の検討を行いたい。

（1）出土遺物の様相

奈良時代では3点と少数ながらSI01出土の土器群を紹介し、在地産の土師器盤状壺に伴うであろう蓋や須恵器の円面鏡といった優品の存在も確認できた。特に後者については使用痕跡も明瞭に残り、8世紀前葉という時期に観を保有・使用した識字層が谷戸内で活動していたことを示す貴重な発見といえる。

平安時代では9世紀後半～10世紀前半、さらに絞り込めば9世紀第4四半期～10世紀第1四半期を中心とする時期に、SE01とSK203・SK230から土器供膳具の器種構成を示す好資料を抽出することができた。ロクロ土師器は単体で出土した際の年代比定が難しいことから、一定量の相模型壺と伴出したことで、今後、周辺での出土例を検討する上でも指標となり得よう。また、土器組成の観点からは、供膳具の主体である土師器の相模型壺をロクロ土師器の壺・皿が補う様子が窺え、SK230のように時期が下るにつれて後者の比率が増してくる状況も垣間見えた。こうした在り方は、この時期は国府周辺を除き未だロクロ土師器を多く持たない相模中央部の土器様相と異なる一方、9世紀中葉にはロクロ土師器が供膳具の主体となる三浦半島とともに共通せず、両地域の中間に位置する鎌倉の地域性を示す事例と言えるのか、興味深いものがある。鎌倉郡域でもロクロ土師器のまとまった出土例は逗子市池子遺跡群に限られるが、主体となる時期が9世紀第4四半期～10世紀第1四半期と本遺跡と重なるので、土器型式とともに組成の比較を行うことで郡域における物資流通や他地域との交流の実態を把握できるようになるだろう。三浦半島のロクロ土師器には房総半島の土器との親縁性が指摘されている（松山2000・中三川2009）、相模一国に留まらない視点で考察を進めていく必要もあるだろう。そのためには、各遺跡の性格が基礎的、且つ最も重要な情報となることは言うまでも

ない。

（2）遺跡の性格について

前項では奈良時代における識字層の存在を指摘し、平安時代では西暦900年前後における土器廃棄の実例を確認した。後者には墨書き土器が多く含まれ、SK203とSK230では記入部位は異なるものの、「巨」と読める共通の字形でほぼ占められていた。神奈川県下では同じ字形の類例はなく（荒井・志村編2009）、この時期、谷戸内を拠点とした集団にとって一種シンボリックな文字または記号であったのだろう。

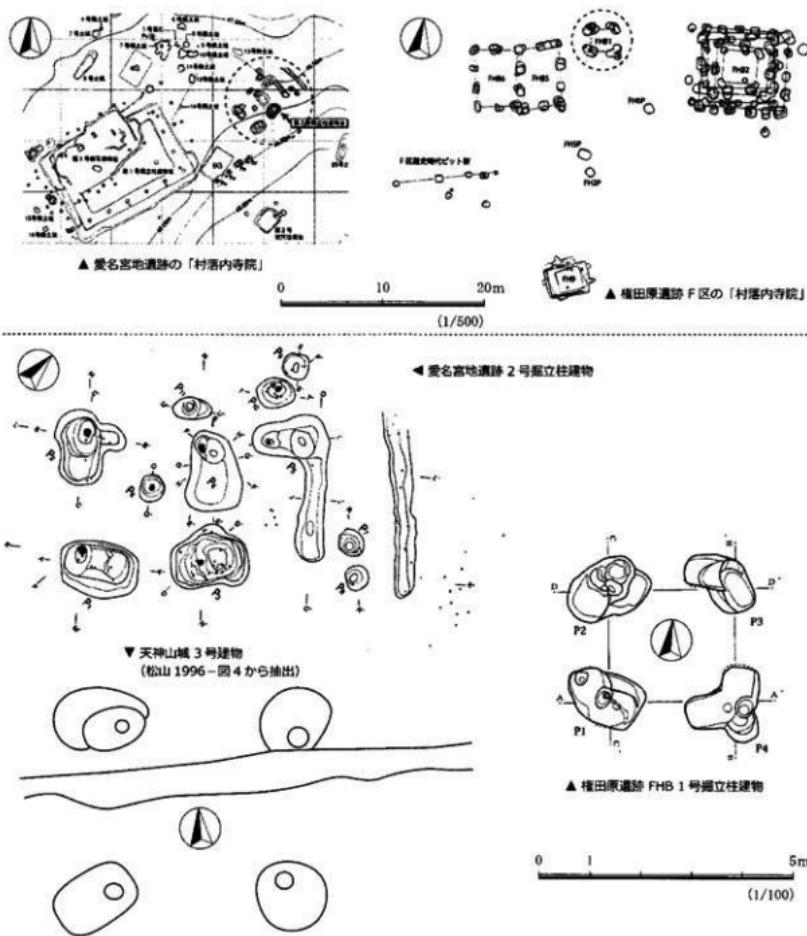
本稿に掲載した以外の遺物としては、一定量の古代瓦が出土している点が目を引く。調査範囲の全域から破片点数にして200点以上が出土しているといい、SK230での出土から10世紀前半まで遡る事例が最も古いとされる。国庫補助事業の報告では、丸瓦4点と平瓦1点が図示されている。ともに凹面に布目痕を残し、凸面調整は丸瓦がナデ、平瓦が繩目タタキとなっている（松山他1997）。また、平安時代中期の住居には、カマドの構築材に瓦を用いている例も認められたという（松山1996）。筆者は古代に限らず瓦には不慣れで正確な観察眼をもたないが、未報告分も含めて全体に薄作りで灰色に焼き締まっている印象を受けた。報告された5点より大きい破片が多くあり、凹面の横骨文字として左右反転で浮き出た「上」を有する平瓦片も見受けられた。県内では海老名市相模國分寺跡や厚木市鎌ヶ嶺廃寺跡に類例があり、南多摩窯跡群での生産が考えられている（加藤・富永2000、國平2008）。出土量から総瓦葺きは想定し難いが、10世紀前後の時期に瓦葺き建物が谷戸内に存在した可能性は考えて良いだろう。同時期の資料には灯明具としての痕跡を明瞭に残す土師器の相模型壺や灰釉陶器の段皿・短頸壺などの出土品もあり、少なからず仏教的色彩を見出すことができる。

検出遺構にも、一般集落の中に位置付けるには異質な事例がある。先に触れた1間×1間の掘立柱建物であり、報告書では「3号建物址」と呼称されている。方1間の建物は通常の集落でも皆無とは言えないが、注目されるのは本遺構の規模である。第6図左下には、本遺構の平面図を掲げた。縮尺1/400の遺構全体図（松山1996-図4）から抜き出して1/100に拡大したため、大括弧で囲まれて図面となっていることを承知されたい。4基の柱穴全てに径約40cmの柱材が40~50cmの高さで残り、いずれも主軸から北東に15°ほど傾いた状態で検出されたという。鎌倉郡家Ⅱ期政庁域の中心建物でも柱材の太さは径30cm前後であり、その点だけでも異様さを感じるが、平面規模も柱材の中心間距離で東西3.5m×南北3.2mと、方1間の建物としては非常に広い。出土遺物に関する情報は提示されていないが、SE01などと同時期の9世紀末~10世紀前半頃の遺構ということである（松山他1997）。

第6図には、方1間建物の事例として厚木市愛名宮地遺跡の2号掘立柱建物と横浜市都筑区権田原遺跡のFHB1号掘立柱建物を掲げた。前者は主柱穴の中心間距離が2.3mで束柱の可能性をもつ柱穴や溝状プランを呈するピットが周辺に点在しており、方1間建物に付帯する構造物が存在した可能性も考えられる。主柱穴の一つP4では、確認面上に並んだ状態で完形の土師器相模型壺5点が出土しており、全て灯明具であった（日野・境1999）。成形の粗雑化が進んだ資料で占められ、10世紀前半~中頃の所産と考えられる。出土状況からは、建物の廃絶に伴う儀礼行為などを想定することも可能であろう。

権田原遺跡のFHB1号建物は主柱穴のみで構成され、柱穴の中心間距離では東西2.5m×南北2.15m程度の規模を測る。柱穴の覆土からは土師器の南武藏型壺や甕、釘といった鉄製品が出土しており、土器様相から9世紀前半~中葉の構築・使用年代が考えられている（鈴木・古屋2013）。

上に掲げた両遺跡とも、神奈川県下では「村落内寺院」の良好な事例として著名である。伽藍をもたない



第6図 1間×1間建物の事例

ため、「寺院」よりも「仏堂」という名称が妥当だろう。愛名宮地遺跡では8世紀中頃以降の構築を見られる2間×5間の布掘りで三面廻が付く1号掘立柱建物が廃絶した後、その北西隅に簡素な基壇をもつ1間×3間の1号礎石建物が構築されている。基壇上および周辺には焼土や炭化材とともに多量の瓦塔や灯明皿として使用された土師器の相模型坏、鉄鎗形の土師器や須恵器、釘や鍔などの鉄製品が出土しており、仏教関連の施設であったことが明確に窺える。相模型坏を中心とする土器様相から9世紀の末頃に廃絶したと考えられ、前掲の2号掘立柱建物と同時存在していた可能性は高いだろう(第6図左上)。こうした状況を踏まえ、2号掘立柱建物について「簡素な造りの塔」とする見方も出されている(國平2008)。

権田原遺跡では「仏堂」として9世紀初頭～後半の中で3時期の変遷を示すFHB2a～2c号建物など3棟の掘立柱建物に方1間のFHB1号建物も含まれ、「小堂」に位置付けられている。これらの建物から15m程度の空闊地を挟んだ南側には9世紀後半～10世紀初頭のFH9a号竪穴住居が存在し、土師器南武藏型壺やロクロ土師器壺の灯明皿・鉄鉢形土器が出土しており、一連の建物で「村落内寺院」を構成していたと考えられている（第6図右上）。当地域では北川表の上遺跡において方1間の建物が8世紀前半～後半に3段階の変遷を見せ、これらが権田原PHB1号掘立柱建物にとって系譜上の前身であった可能性も示されている。

天神山城については古代遺構の全体像が不明であり、「3号建物址」の性格について結論を出すのは急に過ぎるだろう。ただ、本稿で紹介したように墨書き資料を含む同時期の土器群に加えて多くの瓦片が周辺から出土している状況を鑑みれば、西暦900年を前後する時期、谷戸内に仏教関連施設が存在していた可能性は十分に考えられ、異様ともいえる規模と併せて「村落内寺院」とされる遺跡に類似建物が存在していた点、検討を進めるに当たり参考となろう。8世紀段階での識字層の存在も含め、古代の当地域にあって谷戸内に存在した施設、延いては当地で活動した人々の具体像が明らかになることで、これまでとは違った角度から周辺遺跡の調査内容を見直すきっかけにもなるのではないだろうか。そのためにも正式報告の刊行は欠かせないし、小篠がそうした動きの一歩となることを願っている。

(2015年9月30日脱稿)

〔謝辞〕

今回、未報告資料の紹介に当たって鎌倉市教育委員会の永田史子氏と沙見一夫氏にはご高配を賜った。須恵器の生産地については加藤恭朗氏・鶴間正昭氏・根本靖氏をはじめ多くの方々に資料を実見していただき、貴重なご意見を賜った。各氏にはこの場を借りてお礼申し上げます。また、出土瓦の特徴については原廣志氏から多くのご教示を賜ったものの、本稿では十分に反映させることができなかった。勉強を進めた上で改めて紹介の機会を得て、氏の学恩に応えたい。

引用・参考文献

- 赤星直忠 1959 「鎌倉市史 考古編」鎌倉市
 赤星直忠 1979 「神奈川県史 資料編20 考古資料」神奈川県
 荒井秀規・志村佳子編 2009 「神奈川県出土墨書・刻畫土器データベース」『明治大学日本古代学研究所ホームページ』http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html
 伊丹まだか 2012 「天神山城遺跡（No384）出土の漆塗りの小箱」『かまくら考古』第14号 特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所 4頁～5頁
 加藤芳明・富永樹之 2000 「厚木市七沢の鐘ヶ嶺採集の瓦について」『神奈川考古』第36号 神奈川考古同人会 157頁～164頁
 菊川英政 1995 「天神山採集の古墳時代後期土器」『鎌倉考古』No33 鎌倉考古学研究所 3頁～6頁
 國平健三 2008 「瓦が語る一かながわの古代寺院」 神奈川県立歴史博物館
 斎木秀雄 1981 「山崎水道山戸ヶ崎遺跡」『鎌倉考古』No5 鎌倉考古学研究所 7頁 第1図～地点⑧
 鈴木重信・古屋紀之 2013 『権田原遺跡 IV』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告46 公益財團法人横浜

市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター

田尾誠敏 2007 「3 律令制下の土師器」『土器の考古学』暮らしの考古学シリーズ① 学生社 80頁-131頁

高柳光寿 1959 『鎌倉市史 総説編』鎌倉市

滝澤晶子・宮田 真 2013 「天神山城 (No384) 山崎字宮廻656番19地点」『鎌倉市埋蔵文化財君球調査報告書29 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会 299頁-326頁 第1図-地点⑤

田代郁夫・浜野洋一 1994 「8.天神山下城 (No358) 山崎字宮廻708番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 (第2分冊)』 179頁-188頁 第1図-地点⑥

田村良照 1999 「倉久保遺跡 (No226) 山崎字富士塚868番82地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会 197頁-210頁 第1図-地点⑦

田村良照 2002 「付録 古代鎌倉郡の横穴墓様相」『鎌倉の横穴墓-調査報告と資料集成-』東国歴史考古学研究所 調査研究報告書第30集 東国歴史考古学研究所 1頁-61頁

椎 実 1996 「倉久保遺跡 (No226) 鎌倉市山崎字清水塚1550番1外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会 81頁-106頁 第1図-地点⑧

椎 実他 2005 「天神山城 (No384) 山崎字宮廻747番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会 219頁-230頁 第1図-地点⑨

土屋浩美 1997 「鎌倉市No77」「神奈川県埋蔵文化財調査報告39」神奈川県教育委員会 25頁

土屋浩美 2002 「寺分富士塚遺跡 寺分1丁目502番1他19筆所在」『鎌倉の横穴墓-調査報告と資料集成-』東国歴史考古学研究所調査研究報告書第30集 東国歴史考古学研究所 1頁-50頁 第1図-地点⑩

中三川 異 2009 「古代の三浦半島」「三浦半島考古学事典」横須賀考古学会 25頁-29頁

根本志保 2008 「天神山城 (No384) 山崎字宮廻689番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』鎌倉市教育委員会 187頁-199頁 第1図-地点⑪

服部敬史はか 2011 「南多摩窯跡群須恵器縄年の層年代検討」『八王子市史研究』創刊号 八王子市 62頁-84頁

日野一郎・境 雅仁 1999 「愛名宮地遺跡 県宮厚木愛名団地建設に伴う発掘調査報告書」愛名宮地遺跡調査団 藤沢市教育委員会 博物館建設準備担当 1997 「神奈川の古代道」

松山敬一朗 1996 「天神山城遺跡の調査」『第6回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会資料』鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所 第1図-地点⑫

松山敬一朗他 1997 「天神山城 (No384) 山崎字宮廻760番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会 1頁-48頁 第1図-地点⑬

松山敬一朗 2000 「三浦半島のロクロ土師器」『横須賀考古学会 研究紀要』第2号 横須賀考古学会 23頁-50頁

三ツ橋正夫他 2009 「天神山城 (No384) 山崎字宮廻689番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会 177頁-190頁 第1図-地点⑭

若松美智子 2002 「水道山遺跡 (No20) 台四丁目1169番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 (第2分冊)』鎌倉市教育委員会 75頁-143頁 第1図-地点⑮

【資料紹介】 宮山中里古墳群出土の装飾付須恵器破片について

東 真江

はじめに

1. 宮山中里古墳群の概要
2. 宮山中里古墳群出土須恵器子持壺破片について

3. 宮山中里古墳群出土須恵器子持壺破片と古墳群被葬者像について
- おわりに

はじめに

宮山中里遺跡は、神奈川県高座郡寒川町宮山に所在する遺跡で、平成12年度から13年度にかけて財団法人かながわ考古学財団により、一般国道468号（さがみ縦貫道）寒川北インターチェンジ建設事業に伴う事前記録調査として発掘調査が行われたものである⁽¹⁾⁽²⁾。当時、さがみ縦貫道や園央道といった相模川の中流域での発掘調査により徐々に低地での遺跡の存在が明らかになっていく中で、相模川の沖積微高地での遺跡の発見、さらには神奈川県では希少な例である古墳時代後期前方後円墳を含む古墳群の発見ということで、注目をされた遺跡である。

今回、この古墳群から出土した遺物の中に関東地方での出土例があまり知られていない装飾付須恵器破片が含まれることに注目し、取り上げてみることとする。既に調査は終え正式な調査報告書が刊行されているが、これまでこの資料については管見の及ぶ限り特に紹介されてこなかった。今回、この資料を取り上げることで、相模川下流域における古墳のあり方と古墳群の被葬者像に一考を附すものである。なお、本レポートにおける遺構、遺物等の表現については、調査報告書によるものとする。

1. 宮山中里古墳群の概要

宮山中里古墳群は、宮山中里遺跡に含まれる古墳時代後期の古墳群である。遺跡は、近世堤防関係の遺構等、古代から中世の集落、古墳時代後期の古墳群、弥生時代後期後半から古墳時代初期の環濠集落と、複数の年代をまたぎ様々な人類活動が認められている。

この発掘調査で、今回取り上げる宮山中里古墳群を含む古墳時代後期には、古墳8基と土坑が検出されている。発掘調査報告書によれば、古墳については、いずれも後世の削平により墳丘部分が消滅し、周溝のみが確認され、それらの形状から円墳7基、前方後円墳1基の存在が明らかになっている。古墳群の分布としては、前方後円墳であるH5号墳を中心に円墳ともしくは円墳と推定される古墳6基が周囲をとりまくよう配置されており、北側約40m程度の空白部分を挟みH1号墳が検出された。H5号墳を中心とした古墳集中部分は南北約100m、東西約50mの範囲にわたり、いずれの古墳の周溝も切り合うことなく隣接して配置されており、これらの古墳群が連続的に築造されたものであると報告されている。

それぞれの古墳についてみてゆくと、H1号墳は円墳で、全体が削平され、墳丘自体は消滅している。後世の遺構により各所を寸断されてはいるが、全体の西側約半分程度が検出されている。主体部等の施設は確

認されず、周溝底面は船底状を呈し、計算上の復元した周溝内部の直径は確認面で約12~13mを測り、周溝上端幅は約3m程度であったとされる。遺物については、土師器、須恵器の破片が周溝底面~覆土下層にわたり散在して出土している。ここから出土した須恵器破片に今回取り上げる装飾付須恵器の子持壺の装飾部分の一部が含まれる。古墳の埋没時期としては、遺物から年代観を示すものはないが、須恵器破片が接合しているH5号墳の場合6世紀後半から7世紀初頭に帰属するものであることから、同時期であると考えられている。H2号墳は周溝の一部のみが確認され、円墳であると推定されている。周溝内側の推定径は約13m、周溝上端幅約3mを測る。周溝断面は船底形を呈し、最深部で約80cmを測る。出土遺物は、周溝底面から覆土下層にかけて散在的に出土している。土師器H4号墳周溝出土遺物と接合する土師器壺破片も含まれる。また、周溝最深部分の底面から弥生時代後期の壺形土器が出土している。他に、比企型壺とよばれる土師器壺が2点出土し、これらの土師器壺は6世紀後半から7世紀初頭のものと考えられる。H3号墳は周溝の一部のみが確認され、全体の規模や形状は不明であるが、円墳であると推定されている。周溝内側の推定径は約11m、周溝上端幅約2.1mを測る。周溝断面は逆台形状を呈し、最深部で約55cmを測る。遺物は、時期不明の土師器破片が1点周溝覆土上層から出土しているが、本古墳は規模、形態ともに他の円墳と若干異なるとの指摘が報告者によりされている。H4号墳は直径約20mの不整な円形に周溝が掘られ、南東側の一部を意図的に土橋状に掘り残している。主体部は未確認である。周溝内径は約14m、周溝上端幅約3.8mを測る。周溝断面は逆台形を呈し、深度は約80cmから1m前後を測る。周溝内からはウマの上下顎骨と推測される獸骨が2箇所に分かれて出土している。他の遺物としては、駿東型の土師器壺、須恵器壺身、H3号墳の遺物と接合する駿東型模造の土師器壺があり、これらの遺物は7世紀初頭のものと考えられている。H5号墳は前方後円墳であり、全長約30mを測り、後円部の周溝内部直径は約15m、前方部南端の東西幅は約13m、くびれ部分の東西幅は約8m。墳丘は削平され主体部は確認されていない。周溝は部位によって幅をえらぶ、約3.2mから6m、断面は逆台形状から船底形に変化し、深度は漸移的な高低の変化を繰り返す。部分的に2箇所周囲よりも高く掘り残されている。約1mから1.2m前後を測る。土層観察から、他の古墳よりも若干埋没開始が早いことが推定されている。出土遺物は、土師器壺が5個、このうち須恵器壺身模造の土師器壺1個、土師器比企型壺3個を含む。土師器壺、須恵器短頸壺、H1号墳出土須恵器破片と同一個体と考えられる須恵器子持壺破片である。これらの出土遺物から6世紀後半に属するものが大半であり、埋没時期の上限もその時期に相当するものと考えられている。H6号墳は遺構全体の規模、形状は不明であるが、全体の規模や形状は不明であるが、円墳であると推定されている。周溝内側の推定径は約14mから15m、周溝上端幅約3.7m末の壺形土器の破片が出土している。H7号墳は南側を削平されているが、遺構のほぼ全体が検出され円墳であると考えられている。周溝内側の推定径は約14m、周溝上端幅約3.3mを測る。周溝断面は船形状を呈し、最深部は約80cmを測る。出土遺物は覆土下層から底面付近で土師器広口壺、礫が出土している。H8号墳は一部後世に削平されているが、全体が検出されている。直径約14mの不整形な円形に周溝が掘られ、南東側の一部を意図的に土橋状に掘り残している。主体部は未確認である。周溝内径は約14m、周溝上端幅約3mを測る。周溝断面は船底形を呈し、深度は最深部で約50cmを測る。出土遺物は礫及び周溝底部付近から土師器壺が出土している。時期としては7世紀初頭のものであると考えられている。

以上、宮山中里古墳群のそれぞれの古墳を概観した。次に出土遺物の中から、須恵器子持壺破片について考えていくものとする。

2. 宮山中里古墳群出土須恵器子持壺破片について

宮山中里古墳群出土須恵器子持壺破片は、H1号墳とH5号墳のいずれも周溝から合計3点の破片が出土している。H1号墳とH5号墳から出土した破片は接合し、口縁径12.8cm、器高5.9cm、胴部最大径13.0cmを測り、長石の微粒多量、雲母粒少量を含む装飾壺部分を残存する。もう1つの破片は、H1号墳周溝から出土したもので、器高3.1cm、装飾壺胴上半を残存し、装飾部との接合痕を残すものが出土している。このうち、H1号墳とH5号墳から出土した子持壺装飾部分が遺構をまたぎ約100mの距離を隔てて接合していることから報告者は2点の同一個体の出土位置について「人為的な移動が介在しているもの考えられる。」とし、また全体の器形については、「推定し得ない」ものとしているが、子壺に底部があり穿孔が認められないといった点は特徴としてあげることができる。また報告時点では、神奈川県内における類例については確認し得ていない。ここでは、装飾付子持壺研究状況を確認し、周辺での出土状況を見てみることとする。

装飾付須恵器については、山田邦和氏による詳細な研究が挙げられる^(注2)。また、2001年月刊考古学ジャーナルにおいて、「装飾付須恵器について考える」と題し特集が組まれておらず、研究状況がまとめられており地域的に偏りのある出土状況であり、関東地方については出土例がほぼないことが知られている^(注3)。こうした状況から神奈川県においては装飾付子持壺という器形の存在自体の認知度が低い現状がある。

先述の山田氏の研究によれば装飾付須恵器という呼び方は、小型土器をつけた製品と、人物・動物などの小像をつけた製品の総称として使われており、このうち前者については「子持須恵器」、後者を狭義の「装飾付須恵器」と呼称されることが多い^(注4)。これらの須恵器の多くは古墳から出土しており、当然のことながら窯跡からの出土例もあり、他の須恵器器種と比較することが可能である。時期ごとに分布状況の変化が見られ、5世紀以降畿内・九州北部を中心に分布が認められ、6世紀前半には近畿地方とその周縁地域、6世紀後半近畿地方、中国・四国地方に分布の中心が変化する。7世紀には全体に減少へと向かうと指摘されている。関東地方以東の地域における分布状況は宮城県内横穴墓から2点、群馬県内古墳から2点、住居址から2点、出土地点不明1点、栃木県内古墳から1点、埼玉県内古墳から4点、本遺跡である神奈川県から2点の出土が認められるが、きわめて僅少であることがわかる。詳細な分類について山田氏は、岸本雅敏氏の分類を元に詳細な分類を再構成し、高环形器台と装飾付き壺を結合した品をI類、胴部突帯を持つ品をII類、胴部突帯を持たないIII類とし、装飾の種類で三種に分け、a類として子持壺、b類として配像壺、c類は子持配像壺がそれぞれI・II・III類に組み合わされて分類した。今回の資料については、大胆に想像すると、本体の壺と子持壺の接続の角度や突帯痕が確認できることから突帯III-1~3aに納まるものと考えられる。

近年、関東地方で発見された装飾付須恵器としては、埼玉古墳群奥の山古墳から出土したものが知られている。2014年3月に刊行された報告書によれば、装飾付須恵器壺が3個体出土しており、これらは、胎土分析により埼玉県を含めた北関東産の可能性が指摘されており、器形の特徴としては、脚が付かない、親壺・子壺とも壺の器形に近い、親壺と子壺の文様が同じ、親壺と接合した小壺はいずれも底部がない、といった特徴が挙げられている^(注5)。時期は、TK15~TK10形式（6世紀前葉）を与えられている。

また、装飾付須恵器の中でも、出雲型子持壺については、島根県埋蔵文化財センター池澤俊一氏による詳細な分析があり、出雲型子持壺の特徴として、全国各地でみられる装飾付須恵器は一般的に装飾され、丁寧に作られているのに対し、出雲の子持壺の大半はつくりが粗く、子壺に蓮形を採用し、親壺が底抜けになっ

ている点が挙げられている^(注6)。これらは5世紀末～6世紀初頭には器台とセットで用いられる壺・瓶の一部に子持壺、子持瓶が使用されるようになり、6世紀中ごろに出雲型子持壺が出現し、子持壺・子持瓶とこれらを載せる筒型器台が結合し成立した祭祀用土器となったと考えられている。また、出雲型子持壺には脚部の有無、親壺口縁部の形から3つに分類することができ、複数の系統が存在し、それぞれ別個に生産・流通していた可能性を指摘している。

今回、取り上げた宮山中里古墳群出土子持壺は、親壺の器形は不明だが、子壺の器形は瓶を意識したものではなく、底部が作られ、穿孔が認められないことから出雲型子持壺の要素は少ないといえるだろう。装飾壺分布の一地域である東海地方は古代から中世にかけて旧相模国域で流通する須恵器の大半を担う生産地であるが、この地域では形象つまみ付き蓋が主流を占め、子持壺を伴う器形の生産例がごく少ないと知らされている^(注7)。

3. 宮山中里古墳群出土須恵器子持壺破片と古墳群被葬者像について

以上、装飾付須恵器の研究状況及び、関東での出土状況を確認した。出土状況からも、装飾付須恵器子持壺の出土例が関東以北では極めて少ないと認められる。また相模地域では当該期須恵器生産は行われておらず、地元で作成されたものではない。では、この遺物はどのような意味をもって宮山中里古墳群にもたらされたのか。

装飾付須恵器は古墳の墳丘や周溝部から出土することが多く、これにより古墳の埋葬主体部の形態いかんとは直接関係がなかったようであり、また墳丘形態は前方後円墳からの出土が多い傾向は認められるが横穴墓からの出土例もあり、装飾付須恵器の出土する古墳は古墳群の中で最も古く築造されたものと推定され、ある土地を墓域として設定し、最初の古墳を造影した際に、装飾付須恵器をもちいた葬送儀礼がおこなされた、すなわちある造墓集団の始祖となる首長の葬送を飾る儀礼であると山田氏は見解を示している^(注8)。これについては、宮山中里古墳群の意義を考える上で重要な見方であるだろう。筆者は、以前神奈川県西部地域の古墳時代後期における地域勢力の変遷を考える中で、金目川流域では、古墳時代前期の塚越古墳から、中期の前方後方墳の可能性がある北金目神社古墳、後期の二子塚古墳（秦野市）、市場古墳（平塚市）へと継続して伝統的な前方後円墳・前方後方墳を築造することが出来た集団を想定し、古墳の副葬品として金銅製装飾大刀などの威信材は豊富ではないことを確認した^(注9)。この相模川東岸地域においても、前期の秋葉山古墳群（海老名市）、中期の応神塚古墳群から継承される、伝統的勢力が前方後円墳を中心とした宮山古墳群を築造し、東海地方や近畿地方との首長間の長年の築いてきた関係性の中で、装飾付須恵器を用いた葬送儀礼を取り入れたと推測することできるだろう。それは国家成立に向け、大和政權がミヤケや國造制といった人民支配の制度を整えていく社会変化の中で、丹沢南麓や小田原平野といった新興の地域首長と一線を画す、相模地域全体へ向けた伝統勢力としての政治的アピールであったのではないだろうか。

おわりに

宮山中里古墳群から出土した子持壺破片から、古墳群被葬者像について若干の意見を述べてみた。

装飾付須恵器は東海地方以西、近畿地方を中心とした分布様相を見せるもので関東地方での出土例は極め

て少なく、今回示した子持壺の例は関東地方の中では今のところ見られない。こうした状況から、装飾付須恵器を用いた葬送儀礼の取り入れることで、首長間の政治的連帯性を示していると考えることができる。

具体的にどの地域の首長との関係からもたらされたものかは、不明であるが報告者の指摘するように政治的な意団を持って副葬されたことは言えるだろう。

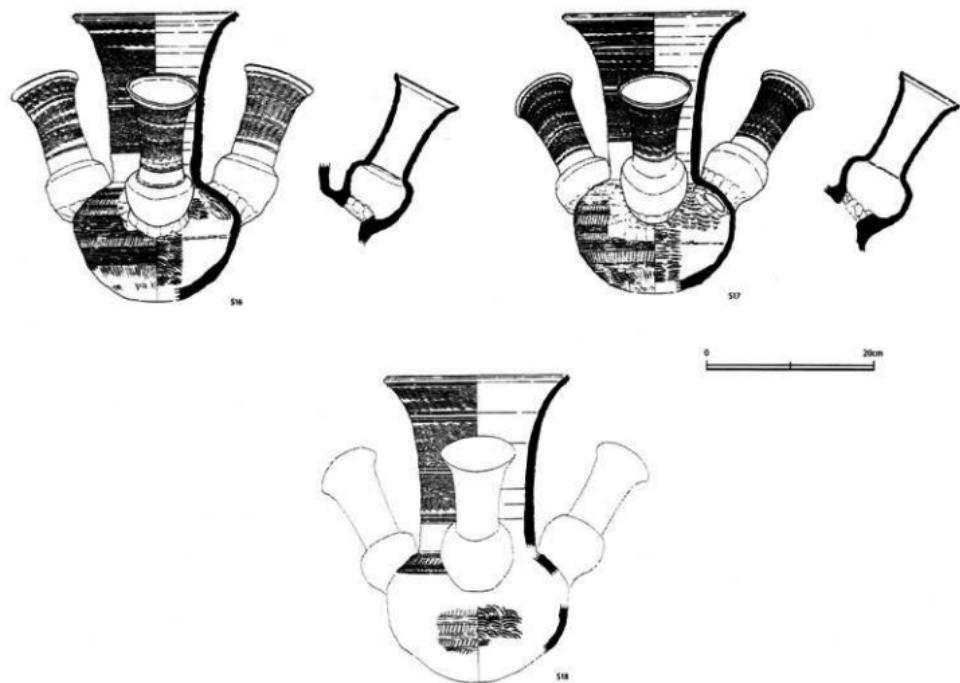
本論をまとめる上で、神奈川県教育委員会、島根県埋蔵文化財センター内田律雄氏には多大なご協力を頂いた。記して感謝を示したい。

註

- (1) かながわ考古学財団 2004 「かながわ考古学財団調査報告書170 宮山中里遺跡 宮山台畠遺跡」
- (2) 山田邦和 1998 『須恵器生産の研究』 学生社
- (3) ニューサイエンス社編 2001 『月刊考古学ジャーナルNo476』
- (4) 山田氏 前掲書 p186、187
- (5) 佐藤康二編 2014 『史跡埼玉古墳群 奥の山古墳 発掘調査・保存整備事業報告書』埼玉県立さきたま史跡の博物館
- (6) 池瀬俊一 2004 「出雲型子持壺の変遷とその背景」「考古論集－河瀬正利先生退官記念論文集－」河瀬正利先生退官記念事業会
池瀬俊一 2011 「出雲型子持壺が語るもの」「八雲立つ風土記の丘平成23年度企画展 出雲型子持壺の世界」島根県八雲立つ風土記の丘
- (7) 山田氏 前掲書 p 282
- (8) 山田氏 前掲書 p 229～243
- (9) 東真江・露田俊浩 2010 「神奈川県西部の古墳後期における地域勢力の変遷と師長国造」「国造制の研究－史料編・論考編－」篠川賢・大川原竜一・鈴木正信編、八木書房



第1図 宮山中里古墳群 H1・H5号墳出土 装飾付須恵器子持壺^(註1)



第2図 埼玉古墳群 奥の山古墳出土 装飾付須恵器子持壺^(註5)

執筆者紹介 蝦瀬義紀 (相模原市教育委員会)
押木弘己 (鎌倉市教育委員会)
東真江 (大磯町役場)

会誌担当役員 渡辺千尋・砂田佳弘・平山尚言

今号からA4判となり、大きく見やすいレイアウトになりました。

英文題目にはエドワーズ・ウォルターメンバの協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

考古論叢 沖ノ河 第22集

平成28年(2016)1月29日 印刷

平成28年(2016)2月10日 発行

編集・発行 神奈川県考古学会
事務局 〒232-0067 横浜市南区弘明寺町201 岡本孝之気付
郵便振替 00240-9-71208
e-mail soumu@koukokanagawa.net
URL <http://www.koukokanagawa.net>
印 刷 株式会社アルファ

KOKO-RONSOU KANAGAWA

vol.22

CONTENTS

Articles

- Yoshinori KOIBUCHI Regionality within Kanagawa Prefecture in the latter half of the Horinouchi 1 style period

Report on materials

- Hiromi OSHIKI Ancient period pottery recovered from Tenjin'yamajō(remains) in Kamakura City

- Masae AZUMA On sherds of Sue ware decorated with miniatures recovered from the Miyayama Nakazato Tomb Group

2016.2